
遊戯王GX～パラレル・トラベラー～

カイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〜パラレル・トラベラー〜

【Nコード】

N4694Z

【作者名】

カイナ

【あらすじ】

デュエルモンスターズが好きな双子の少年ライとアルフ、その幼馴染である少女エルフィ、ライとアルフの両親であるレオとメリオル。五人は偶然一緒になった帰り道、泥酔して線路上に落ちこちてしまった美女と青年を助けるため線路に下りるが間に合わず進入してきた電車に轢かれかけ、その瞬間五人の意識がなくなる。それから彼らがいたのはどこもしれぬ空間、そこに立っていた美女。神によれば五人はもとの世界では死んでしまい、元の世界に戻る事は出来ないがせめてものお詫びにと別の世界で新たな人生を歩む事

を提案される。

これは五人が遊戯王GXの世界に転生し、その子供達がそこに住む者達と繰り広げるストーリー！。

プロローグ

とある地下鉄の駅、夕方とも言える時間帯に三人の少年少女がここで電車を待っていた。

「いやー、楽勝楽勝。今回も優勝しちゃったね。やっぱり俺らは最強のトリオだ!」

「兄さん、油断してたら足元掬われるよ」

「そうそう。あなた一人で三人抜きしたのもあつたけど手も足も出ずにやられて私達がフォロースタしたのも多かつたわよね」

黒い髪をざつくばらんな短髪にしている元気な少年がけらけらと笑いながら口を開くとその隣に立っている、こっちは水色の髪を短く切って整えている少年が黒髪の少年を小突きながら言い、その逆横に立っている、金髪をボーイッシュな短髪にした少女がクスクスと笑いながら続けると黒髪の少年はたははと笑う。

「まったく、相変わらずだなお前らは」

するとその背後から妙に呆れたような笑いながららしい声が聞こえ、三人は振り向く。と黒髪の少年と水色髪の少年が驚いたような顔を見せる。

「父さん！ 母さん！ なんでここに？」

そこに立っていたのは黒髪をざつくばらんな短髪にしている男性、丁度黒髪の少年をまんま大人にしたような外見、違いといえば少

年の瞳が水色なのに対し男性の目は黒いというところくらいかと水色の髪をポニーテールにしている女性。すると男性が笑った。

「仕事帰りだ。残業頼まれそうになったが逃げ出した」

「全くもう、クビになったらどうするの？……で、私は晩御飯の材料買出し。今晚はカレーよ」

男性の笑いながらのあっさりした言葉に女性は呆れたように笑いながら返した後エコバックの中にあるカレールーやニンジンなどの野菜を見せてそう続ける。それに少年二人はやたつと声を出した。

「おっっし、もう一軒行くぞー」

「……もう、帰る……」

すると彼らの横に青年と女性　青年の方は薄緑色の髪を短髪にしており、女性の方は健康な葉っぱのような濃い緑色の髪を長く伸ばしている　が現れ、女性は明らかに酔っているとわんばかりに真っ赤な顔で声を出しており、彼女を支えている青年　こちらも飲んだのか顔が赤い　は必死で女性を支えながらそう声を絞り出す。するとその次の瞬間青年の膝がガクンと折れ、二人の身体が線路上に落下する。

「やべえ！？」

「レオ！？」

それを見た瞬間男性　レオはすぐに鞆をそこに放り捨てて線路に

降り、それに習うように四人も線路に降りる。

「おいあんたら、大丈夫か!?!」

「うゝ……」

「うぷ……」

レオが声をかけるが女性も青年も意識が混濁しているような状態、それを確認するとレオはホームを見上げて声を出した。

「運び上げるので上空けてください! それと駅員さんに連絡お願いします!」

その言葉を聞いた他の人達はその場を退き、何人かはどこかに走っていく。それを見るとレオは線路に降りた身内達を見た。

「ライとアルフ、エルフィはこの子を、俺とメリオルで女性を引き上げるぞ」

その言葉に四人はうんと頷き黒髪の少年　ライ、水色髪の少年　アルフ、金髪の少女　エルフィは青年の両手両足を持って彼を持ち上げ、レオとメリオルは女性を持ち上げる。その瞬間、プーンという音とともに眩しいライトが彼らを照らし出した。

「げっ!?!」

電車が来た、駅員への連絡は間に合わなかったのか、一行はそんな事を考えるがもう酔っ払いの救助どころか自分達が逃げる事すら間に合わない。そう考えながら五人+酔っ払い二人は白い光に包まれていった。

「てめえは本当に！　どれっただけ人に迷惑かけたら気が済むんだ！？」

「う……………」

「いやーあはは、反省してるって……………」

「なん、だ？……………」

怒り心頭とばかりの怒号に飄々としたような謝罪の声、それらを聞いたレオは目を覚まし、起き上がる。

「ここは？……………」

見渡す限り真っ白、これだけを聞くと雪に囲まれた場所でも想像するかもしれないが本当に真っ白、無機質な感覚すら思わせるような場所だ。レオがそう考えている間に周りで気絶していたメリオル、ライ、アルフ、エルフィも目を覚まし、前の方で女性に説教を行っている青年もそれに気づいた。

「ああ、目が覚めたか」

「あんたらはさっきの酔っ払い……………あんたら、何者だ？」

青年の言葉にレオは用心深い様子を見せながら返し、それを聞いた

青年は困ったように頭をかくと女性の方を見た。すると女性はうんと頷いて彼らの前に立つ。

「私達は……まあ、あなた達人間の言葉で言えば私は神、彼は天使という表現が正しいわね」

「か、神様に天使……ねえ」

女性の言葉にメリオルは驚いた様子を見せるが直後何か言いにくそうな表情を見せる。と天使と表現された青年がため息をついた。

「言いたい事は分かってる。仮にも神と呼ばれる存在が街中で酔っ払って電車に引かれかけるような真似するかとでも言いたいんだろ？」

「あ、いや……」

「事実その通りだ。こいつは神としての自覚が欠如してる、もはや人間で言う俗念に塗れたバカとしか言いようがないからな」

「……そ、そこまで……」

天使の言葉にメリオルが言い繕おうとするが神の部下であるはずの天使自身が神をこき下ろし、それを聞いたライとアルフ、エルファイが引きつった表情でそう呟く。すると神がイラッとした様子で天使に食いかかった。

「一緒に酔っ払ってぶっ倒れたくせに！」

「元はといえばお前が放置していた輪廻転生の管理と魂の天国行き

地獄行き裁判の結果を纏めるために一週間貫徹した上酔っ払ったお前が無理矢理酒飲ませたことが原因だろうが!？」

神の言葉に天使が怒鳴り返すと神はぎくりとばかりのリアクションを取って瞬時に顔を逸らす。それから天使はまた呆れたようにため息をつくとしれオ達の方を向いて口を開いた。

「まあ、何を言おうが俺達のせいであなた方が亡くなってしまったという事実には変わりはない。本当に申し訳ない」

天使はそう言って深く頭を下げる。するとライがふと口を開いた。

「ん？ これって……」

「あ、ラノベとかでの転生フラグ!」

ライに続けてアルフも声を出す。すると神が笑い声を出した。

「おー子供は鋭い鋭い。流石に私達のせいで死んじゃってそのままっていうのは後味悪いからね。どっかに転生させてあげようって思ってるのよ」

「転生か……」

その言葉にしれオがぼそりと呟く、と神は何かを考えるように虚空を見上げて頬に人差し指をやるような仕草をした。

「んー、まあ転生って言ったら語弊があるかな？ 正確に言えば容姿と記憶はそのままに別世界に送るって言う方が正しいね」

「異世界旅行かよ……おいちょっと待て」

続けての言葉にまたレオが返す、とそこで気づいたようにここに送られてきた一人 エルフィを見た。

「俺達四人は家族だから良いが、エルフィは戸籍上他人だぞ！？
どうする気だ！？」

「まあ、将来夫婦になる予定だけど」

レオの言葉にライとエルフィが聞いてる方が恥ずかしくなるような台詞をさらっと言い、それにアルフとメリオルが呆れ顔でため息をつく。と神は「ああ」と声を漏らした。

「……ね、なんとかならない？」

「俺に聞くな……そうだな……エルフィ、と言ったか？ 話を聞く限りだが身内にするのは問題がありそうだな。なら、従姉弟が同居しているという事にすればどうだ？ 戸籍調整はこっちでどうにかする」

「出来るのか？」

「こいつはバカだがまがりなりにも神だ。それぐらいは造作も無い」
天使の提案にレオが聞き返すと天使は神を指差しながらさらっと返し、それに神は複雑な表情を見せる。それから天使は少し考えた後また口を開いた。

「それじゃ、あなた達にはどの世界に転生すればいいか考えるが、

希望があれば聞こう。せめてものお詫びだ、なるべく期待に沿うようにするよ」

「転生させんの私なんだけど」

天使の言葉に神が愚痴るが天使はシカト、それを聞いたライは少し考えると右手を挙げた。

「なあ、じゃあ遊戯王の世界は駄目か？ 俺達デュエルモンスターズが好きなんだ」

「確かに、今日も大会で優勝したってはしゃいでたな。もしその世界に行くなら俺達夫婦もデュエルモンスターズに関わる仕事に就かせてもらっていいか？」

ライの言葉にレオがふつと笑いながら返した後そう尋ね、それに天使は少し考えるとああと頷いた。

「分かった、じゃああなた達の世界で言う遊戯王の世界に転生させよう。だがどの時代に行けるかまでは分からないから、その点は許してくれ」

「別にいいよそれくらい。楽しみにしておくからさ」

天使の言葉にライが笑いながら言うと天使も思わず笑みを浮かべる。すると今度はレオが手を挙げた。

「ちょっと待ってくれ、こっちからも一つ頼みがある」

「ん？」

「俺達全員の年齢を五歳でいい、若返らせてくれ。物語の主役は子供達だ。俺達大人は五年の歳月でこいつらが戦えるように立派な裏方になってやるよ」

レオの提案に天使は驚いたように目を丸くする、がやがて目を細めるとくつくつと笑った。

「分かった。任せておけ」

「だーかーらー！ 実際にその作業すんの私なんだけどー！？」

天使の言葉に神が叫び声を上げるがやっぱりシカト、神はぶっすーと頬を膨らませると諦めたようにその旨を了解した。

「分かったわよ。転生転移先は遊戯王の世界、容姿性別はそのままで年齢は五歳若返らせる、ね。まあ頑張ってみるわ……女神エデン、ちよつとばかり本気出してやるわ」

神 エデンは立ち上がると一行を見据えて不敵な笑みを浮かべ、彼女が両手を広げると一行を包み込むように光の魔法陣が敷かれる。

「んじゃ、お達者でー」

「おうー！」

エデンの言葉にライは元気よく右手を挙げて返し、レオはふつと笑うと腕組みをする。それらを見ながらメリオル、アルフ、エルフィも笑みを浮かべていた。

「転移転生、開始！」

その言葉と共に彼らの視界は光に包まれていき、彼らの意識も消えていった。

プロローグ（後書き）

ふう。遊戯王Xに続いて遊戯王小説、今度はGXトリップものです。レオ「さて、今回はどんなプレイングミスが飛び出すかな？」

ミスすんの前提！？ それ酷くないか！？

レオ「一話に一回プレイングミスが出てる前作だ。まあ期待はしない」

うっせーやい……ちなみに今回の主役は前作で脇役だったライとアルフ、エルフィ。ああちなみに言っておくと今回はレオとメリオルが夫婦、ライとアルフはその子供で双子の兄弟となっておりますが、これが彼ら本来の関係なんですよね。エルフィに関しては……まああんまり触れないでください。

レオ「まあ初期の設定が設定だからな」

さてさてGXの世界で彼らはどういう生活を繰り広げるのやら、です。じゃ今回はこの辺で。それでは。

第一話 入学試験デュエル

ある五人の一般人を取り囲む平凡な日々、それはとある夕方の地下鉄の駅で終わりを告げていた。そこで線路に落つこちた酔っ払いを助けようとして電車に轢かれてしまったが実はその酔っ払いは神様であり自分のせいで死んでしまった責任から彼らは容姿性格はそのままに遊戯王の世界へと転生する。それから五年の歳月が過ぎた……。

ここはごく普通の庭付き一戸建ての一軒家の庭。ここで男性と少年がデュエルを行っている。

「レベル3のハウンド・ドラゴンにレベル3のチューン・ウォリアーをチューニング！ シンクロ召喚、現れる！！」「大地の騎士ガイアナイト！！！」

「げえっ！？」

黒髪黒目の男性がそう口上を上げると共に一人の戦士は三本の光輪へと、一体の竜は三個の星へと変化して重なり合い、その輪の中心から光が放たれると男性の場に人馬一体と化した騎士が姿を現し、男性と対峙している少年　男性とよく似た顔立ちをしており違いといえば瞳の色が水色というぐらい　は絶叫を上げる。

「ガイアナイトでニユートを攻撃！　ガイアランスシュート！！！」

「ぎゃああああああつ！！！」LP5000

男性の場に現れた騎士が少年の場の悪魔を貫き、その衝撃が少年のライフを削り取り止めをさす。そして少年はがくと膝をつくとき

慢出来ないように声を荒げた。

「ずるいよ父さん！ こっちの世界にはまだシンクロモンスターは一般流通してないのに！！！」

「これが、カードテストプレイヤーの権力ってもん」

「なわけないでしょっ！！！」

少年の声に彼の父親である男性が笑いながら言っていると突如そんな怒号が響き渡り彼の頭にフライパンがぶち当たる。

「はぐっ！？」

「ったくあんたはまたテスト中のカードを勝手に持って帰ってきて！ 守秘義務守りなさいよ！！」

「あつたたたた……メリオル、んな硬いこといわなくても別にいいじゃねえか少しぐらい……」

「レオだけが怒られるならまだしも妻である私も同時に怒られるのよ！？ 面倒事出さないでよ今がシンクロモンスターの一般流通に大事なことなんだから！！」

フライパンを無防備にくらった男性　レオが悲鳴のような声を出す
すと家の中から女性　水色の髪をポニーテールにしており、端正な顔は怒り心頭とばかりに眉が吊りあがっている　が出てきてそ
う怒号を上げ、レオが頭を押さえながら呟きそう言っているとメリオルは
また怒号を上げる。すると少年　ライはさっきの衝撃でレオのデ
ュエルディスクから落ちたガイアナイトのカードを拾う。

「それにしても、転生先つて5D'sじゃないのにシンクロモンスターとか出して大丈夫なのかな？」

「あゝ、デュエルアカデミアのホームページを見る限り見事にGX時代どストライクだよな」

ライの言葉にレオは先日パソコンで見たデュエルアカデミアのホームページを思い出しながら返す、とメリオルはくすりと小悪魔のような笑みを浮かべた。

「大丈夫よ別に。私はちよつとしたお酒の席で“低レベルのモンスターを組み合わせることで高レベルのモンスターを召喚するシステム”って面白くないですか？”って酔っ払って零しただけだもん。それが偶然ペガサス会長のお耳に届いて、シンクロモンスターの概念が生み出された。それ、だ、け。まあ一応スターダストやレッド・デーモンズとかの5D's時代のキーカードは作らせないよう注意してるから安心してね？ 一般的なシンクロモンスターならともかくそれが量産されたら後々どういう弊害が起きるか分からないし、流石にそれはまずいからね」

(……………性質悪いな……………)

「何か言った？」

「「いえ、何も……！」」

メリオルはあつけらかなとした様子でそう言い、最後に悪戯っぽく微笑んで小首を傾げながら続ける。それを聞いた父と子は心中で咳くがメリオルが何かを察知したとばかりに尋ねると二人は異口同音で返した。

「さーてと、シンクロモンスターが流通した後はエクシードモンスターね。どういう風に提案しようかしら？ ハートランドがこの世界と同じ世界観なのか知らないけど、まあタッグフォースもそうだったんだしNo. を流通させても大丈夫よね。まあ何にせよこっそりさりげなくしないかね……」

メリオルはくるんと踵を返すと策を考える軍師のような表情でどことなくあくどさを感じさせる笑みを浮かべながら家の中に戻って行き、レオとライは顔を見合わせるとはあとため息をついた。

「「ただいまー」」

「あ、アルフとエルフィだ。おかえりー」

玄関の門の方から聞こえてきた声にライはそう返し、少年と少女

少年の方は水色の髪を調えた形で短髪にしており、一見すれば女性にすら見えるような中性的な顔立ちをしている。少女の方は金髪碧眼でその髪はボーイッシュな短髪に切り揃えられている。が庭の方に来た。

「またデュエルしてたの？」

「ああ。父さんシンクロモンスター使ってきてき、負けた」

「……レオさん、ああ今は叔父さんだっけ……大人気ないですよ？」

少年 アルフにライが肩をすくめながら言うと少女 エルフィが呆れたような目をレオに向ける。それにレオがふうと息をついた。

「エルファイが姪か……なんか妙だな、まあ転生前も家族ぐるみの付き合いだっただが」

「私皆と比べて大分乱暴に放り込まれたわよね……私の両親は電車の事故で死んでしまつて、親戚であるここ空時家に引き取られたつて設定だもん。私の名字も空時になつちやつてるし」

レオの言葉にエルファイが乾いた笑い声を出しながら返す。

「ほんとに悪いな、この世界に容姿年齢ほとんどそのままに転生させるとしたらこれが精一杯だったんだ」

「どわっ！？ 天使か、驚かせるなよ……」

さらなる突然の声にレオがびくつとなりながらそつちを見ると、そこには彼らがこの世界に転生する事になった原因の一人である天使が立っており、レオは驚いたように息を吐きながらそう返す。

「さて、いよいよ転生してから五年だな。明日子供三人はデュエルアカデミアへ実技試験とやらを受けに行くんだろ？」

「おう！ 目指せ合格、目指せラーイエロー！」

「ま、原作を辿るならオシリスレッドの方が面白そうだけどね。遊城十代君と同学年になれるみたいだし」

「私は女子だからオベリスクブルー決定ね。どういう風になるのか楽しみだわ」

天使の言葉にライが元気良く言うとおアルフもくすくす笑いながら返し、エルファイもふふつと笑つてそう返す。それを見てから天使はレオを見た。

「あなた方もインダストリアル・イリユージョン社にテストプレイヤーとカードデザイナーとして就職させましたけど、何か不都合は？」

「あーいやいや、結構いいとこ出て就職した事になってるし、庭付き一戸建ての家まで貰っちゃって悪いぐらいだよホント」

「この家に関してはお詫びだから気にしないでください……じゃ、こつちから干渉するのは基本的にこれが最後って事で。後はそつちの方で物語を紡いでください」

「おう！」

天使の心配そうな声にレオは右手を横に振りながら笑って返し、それに天使は軽く会釈をして返した後そう続け、それにライが元氣良く答える。それを天使は一瞥すると柔和に微笑んだ。

「それじゃ、あなた達に大いなる加護がありますように。それでは」
そう言い終えると同時に天使の姿はふっと消える。それを見送った後レオは三人の子供の方を振り返った。

「それじゃ、デュエルアカデミア実技試験頑張れよ。ところでお前ら、原作知識は？」

「流石に五年だもん、大雑把にキャラ設定を覚えてるくらい。GX時代って分かったのもついこの前だし」

「僕も話の流れは大分曖昧になってきてるよ」

「右に同じく」

レオの言葉に子供三人は肩をすくめる、するとそれにレオはふつと笑った。

「それでよしだ。俺達というイレギュラーがある以上原作その通りに進むわけないからな。第二の人生だ、しっかり楽しんで来い。俺達も裏方でカード作って援護するからよ」

「皆ー、ご飯できたわよー。ライとアルフ、エルフィは明日に備えて早くご飯食べてとつと寝なさいねー」

レオの激励の言葉が終わるとメリオルの呼びかけが聞こえ、四人はそれを聞くと「はい」と返して玄関から家の中に入っていった。

それからその翌日、三人は家のドアをバンと開けるとドドドドと地響きが発生する勢いで突っ走る。そしてアルフが怒号を上げた。

「このバカ兄貴!!! 寝坊はいつもの事だけどなんでよりによって実技試験当日にまで寝坊するのさ!?!?!」

「もー! ライを叩き起こすのに大分時間浪費しちゃったわよ!!!」

「だーかーらー、悪かったって言ってんじゃん!」

アルフとエルフィの声にライは全速力で走りながらも両手を合わせて謝る、そんな事をしていながらも三人は僅かにスピードを落とす事すらしていなかった。そして三人は試験会場に到着すると息を荒げながら受付を行うと会場に入場する。それから試験が始まり、最初に受験番号一番の人が呼ばれ、デュエル場に立つ。それから受験番号十番までの人がデュエル場上がった。

「あ、あれ三沢大地だ」

「原作通りなら合格は確定ね。さてと、私達もデツキの確認しておきましょう」

ライが笑みを浮かべながら言うとエルフィはふふつと笑いながら返し、デツキケースからデツキを取り出して確認を始めると二人もそれに習ってデツキの確認を始める。それから少し時間が経った時だった。

「試験番号29番！」

「あ、私ね。じゃあ行ってくるわ」

「頑張れよー」

試験官の声にエルフィは気づいたようにデツキを纏めてデュエルディスクに収めると二人に軽く手を振って言い、ライの言葉にこくと頷くとデュエル場に向かう。試験官は黒いサングラスをした教師だ。

「試験番号29番、空時エルフィです。よろしくお願いします」

「うむ、今出来る全力でかかってきなさい」

エルフィが礼儀正しく礼をして名乗ると試験官もうんと頷いてそう返し、二人はデュエルディスクを展開する。

「デュエル！！！！」

「先攻は貰います。ドロー！」

掛け声の直後エルファイが素早くそう言ってデッキからカードをドロ
ーし、ちらりと手札を見るとその内の一枚を手にとった。

「私は「豊穰のアルテミス」を守備表示で召喚！ カードを二枚セ
ットしてターンを終了します」

豊穰のアルテミス 守備力：1700

豊穰のアルテミス

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族

攻撃力1600 / 守備力1700

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター
罠が発動される度に自分のデッキからカードを1枚ドローする。

エルファイの場に豊穰の名を冠する天使が守りの体勢で姿を現し、そ
の後ろに二枚のカードが伏せられた状態で姿を現す。それからエル
ファイはエンド宣言を行った。

「ふむ、【エンジェル・パーミッション】と言ったところでしょう
か？ 私のターン、ドロー」

「リバースカード、オープン！ カウンタートラップ「強烈なはた
き落とし」。ドローカードをそのまま墓地へ捨ててください。そし
てカウンタートラップの発動によりアルテミスの効果が発動、カー
ドを一枚ドローします」

強烈なはたき落とし
カウンター罫

相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地へ捨てる。

「むう……」

試験官はエルフィのデッキ内容を予測しつつカードをドロー、するとエルフィは伏せていたカードを発動しそれを見た試験官は残念そうな顔をしながらドローカードを墓地に捨て、エルフィは逆にカードをドローする。

「ならば……私は^{チエーンゾー・インセクト}「電動刃虫」を攻撃表示で召喚、バトルを行います！ 電動刃虫で豊穡のアルテミスを攻撃！」

電動刃虫 攻撃力：2400

^{チエーンゾー・インセクト}
電動刃虫

効果モンスター

星4 / 地属性 / 昆虫族

攻2400 / 守0

このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード1枚をドローする。

「リバーズカードオープン！ カウンタートラップ」攻撃の無力化

「！ 攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了。そしてカウンター
トラップの発動によりアルテミスの効果でカードドロウ！」

攻撃の無力化

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

巨大な顎がチェインソーになっている昆虫が現れ、アルテミス目掛けて顎を突き出す。その攻撃は不思議な障壁に阻まれてしまい不発に終わる。そしてエルフィは豊穡の力でカードをドロウした。

「やりますね……私はカードを二枚セットし、ターンを終了します」

「私のターン、ドロウ！」

試験官は手札のカードを二枚伏せるとターンを終え、それを聞いたエルフィはカードをドロウする。するとその瞬間試験官が動いた。

「リバースカードオープン、永続罠「スキルドレイン」を発動します！ ライフ1000ポイントをコストに発動し、フィールド上全ての効果モンスターの効果を無効とします！」 LP 4000 3000

スキルドレイン

永続罠

1000ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

「うっ……」

試験官が発動したトラップを見たエルフィは嫌そうな顔をする。これではカウンタートラップを使った時のアルテミスを始めとした防衛天使の効果が使えない。

「……」
「エンジェルセイント「天空聖者メルティウス」を守備表示で召喚し、カードを一枚セツトしてターンを終了します」

天空聖者メルティウス 守備力：1200

エンジェルセイント
天空聖者メルティウス

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族

攻1600 / 守1200

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分は1000ライフポイント回復する。さらに、フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

エルフィの場に新たな防衛天使が姿を現すが、その真価は試験官のカードによって封じられたままエルフィはターンを終了した。

「私のターン、ドロー。私は「ゴブリン突撃部隊」を攻撃表示で召

喚し、バトル！ 電動刃虫でアルテミスを、ゴブリン突撃部隊でメルティウスを攻撃！」

ゴブリン突撃部隊 攻撃力：2300

ゴブリン突撃部隊

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族

攻2300 / 守0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、

次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「くっ……この戦闘による発動カードはありません、よって二体のモンスターは破壊されます」

電動刃虫のチェインソーとなった顎が豊穡の天使を斬殺し、ゴブリンの大群が天空聖者を滅多打ちにする。幸い二体の天使は守備だったためダメージは通らなかつたもののエルフィの場は全滅だ。

「よし、バトルフェイズを終了しメインフェイズ2に移行します。一応説明を挟みましょう、電動刃虫は戦闘を行ったダメージステップ時に相手に一枚のカードドローを許す効果がありますがそれはスキルドレインによって無効化されます。そしてゴブリン突撃部隊は攻撃を行ったバトルフェイズ終了時に守備表示に強制変更する効果があります。これもまたスキルドレインによって無効となります。メインフェイズ2、私はカードを一枚伏せてターンを終了します」

簡易状況説明

エルファイ：LP4000 手札四枚

フィールド：モンスターなし 伏せカード一枚

試験官：LP3000 手札一枚

フィールド：電動刃虫、ゴブリン突撃部隊全て攻撃表示 スキ
ルドレイン発動中、伏せカード二枚

試験官の場に新たなカードが伏せられる。それらの様子をライとアルフは観客席に当たる席で見守っていた。

「やばそうだね、エルファイ」

「まあな。手札は大分温存してるし……きっと次あたり来るぜ？」

アルフの言葉にライは不敵な笑みを浮かべながらそう言い、それにアルフはふっと笑って返すと二人はエルファイの方を見直した。

「私のターン、ドロー」

「この瞬間、先ほど伏せたりバースカードを発動します！ 永続罫
「最終突撃命令」！ 全ての表側表示モンスターは攻撃表示になり
表示形式の変更を行いません！」

最終突撃命令

永続罫

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

エルファイがカードをドローすると試験官はさっきのターン伏せたカードを発動、それによりエルファイは守備をも封じられてしまった。

「手札から「強欲な壺」を発動し、その効果でカードを二枚ドロー！ よし。手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！ その効果でスキルドレインを破壊します！」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「むうっ！」

エルファイの発動したカードから放たれた竜巻がモンスターの効果を封じるカードを木っ端微塵に砕き、それに試験官はむっと声を出す。その次の瞬間エルファイの背後に城が出来上がった。

「そして永続魔法「神の居城 ヴアルハラ」を発動！ 私の場にモンスターが存在しない時、一ターンに一度だけ手札から天使族モンスターを一体特殊召喚出来る。私は「アテナ」を特殊召喚！」

アテナ 攻撃力：2600

「なんと!？」

サイクロン

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

神の居城 - ヴアルハラ

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

神の住まう城から最上級天使 アテナが姿を現す。それからエルフイはもう一枚手札を取った。

「そして「勝利の導き手フレイヤ」を召喚! フレイヤは私の場の天使の攻撃力、守備力を400ポイント上昇させます! そしてフレイヤを召喚した時アテナの効果発動! 天使が召喚、反転召喚、特殊召喚された時相手に600ポイントのダメージを与える! ジヤッジメント・レイ!」

「ぐうっ!」 LP3000 2400

アテナ 攻撃力:2600 3000

勝利の導き手フレイヤ 攻撃力:100 500

アテナ

効果モンスター

星7 / 光属性 / 天使族

攻2600 / 守800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

勝利の導き手フレイヤ

効果モンスター

星1 / 光属性 / 天使族

攻 100 / 守 100

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

「まだまだいきます！ 永続魔法「コート・オブ・ジャスティス」！ 私の場にレベル1の天使が存在する時手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。私の場にはレベル1の天使、フレイヤが存在します！」

エルフィの場にさらなる永続魔法が姿を現す。そしてエルフィが手札の一枚を手にとった瞬間フィールドに天から光が差した。

「華麗なる金星よ、この場に降臨し光輝け！」「The splendid V E N U S」！！ アテナの効果で600ダメージ、ジャッジメント・レイ！」

「ぐうっ！」 LP 2400 1800

華麗なる光を放ちながら華麗なる金星の天使がフィールドに降り立ち、アテナの放った光線が試験官を襲う。そしてV E N U S光を浴びた試験官のモンスターが力を失っていった。

「V E N U Sはフィールドの存在する限り天使以外のモンスターの攻撃力・守備力を500ポイントダウンさせます。そしてフレイヤの効果でV E N U Sの攻撃力・守備力が上昇！」

電動刃虫	攻撃力：2400	1900
ゴブリン突撃部隊	攻撃力：2300	1800
The splendid V E N U S	攻撃力：2800	3200

コート・オブ・ジャステイス
永続魔法

自分フィールド上にレベル1の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「コート・オブ・ジャステイス」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

The splendid V E N U S
効果モンスター

星8 / 光属性 / 天使族

攻2800 / 守2400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

また、自分がコントロールする魔法・罠カードの発動と効果は無効化されない。

「むううっ！」

「先生、私のデッキを【エンジェル・パーミッション】って言いましたよね？ 残念でした。私のデッキは言わばエンジェル・パーミッションとヴァルハラ混合デッキ。エンジェル・パーミッションで防ぎ、ヴァルハラやコート・オブ・ジャスティスで上級天使を呼び出し攻める。一個間違ったら手札事故で何も出来なくなるけどそうならないように気をつけて構築してますから」

試験官の表情が変わり、エルフィはにこつと微笑んでそう言う。そしてキツとした表情で試験官の場を指した。

「これで終わりです！ アテナで電動刃虫を攻撃！！」

「その攻撃宣言の瞬間リバースカードを発動します！ トラップ発動、「聖なるバリア ミラーフォース」！ あなたの攻撃表示モンスターは全て破壊されます！」

「パーミッションを舐めないでよね！ カウンタートラップ発動「魔宮の賄賂」！ 魔法・罠の発動を無効にして破壊し、相手は一枚カードをドローする！」

「なっ!?!」

聖なるバリア・ミラーフォース

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

魔宮の賄賂

カウンター罠

相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

相手はデッキからカードを1枚ドロウする。

槍を手に突撃するアテナの前に聖なるバリアが張られるがそれはエルフィが瞬時に発動したカードの力によって消滅し、アテナは槍を構えて電動刃虫の前に立つ。

「くらいなさい、アイギス・スピア!」

「ぐおっ!」 LP1800 700

「ダメージステップに電動刃虫の効果で一枚ドロウ。これで終わりです! VENUSでゴブリン突撃部隊を攻撃、ホーリー・フェザー・シャワー!」

「うおおおおおっ!」 LP700 0

華麗なる金星の天使から放たれた聖なる羽がゴブリン目掛けて降り

注意、それが試験官まで貫通してライフポイントを削り取る。それが試験官への止めとなり、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「私の勝ちですね。ありがとうございました」

「ああ、いいデュエルだった」

エルフィはよしと小さくガッツポーズを取った後ぺこりと頭を下げてそう言い、それに試験官もああと頷くとエルフィはもう一度礼をしてからデュエル上を降りていきライ達の待つ席へと戻っていき、二人を見るとにこりと笑みを浮かべる。

「ちよつと危なかったわ」

「嘘こけ」

エルフィの言葉にライがさらつと返し、エルフィはあらつと肩をすくめて返す。それからまた少し時間が過ぎ、放送が聞こえてくる。

「次！ 受験番号47番！！」

「あ、僕だ」

「頑張れよー」

試験官の放送にアルフはそう言って席を立ち、ライがそう言つとアルフはうんと頷いてデュエル場へと向かう。

「受験番号47番空時アルフ！ よろしくお願いします！」

「?……あ、ああ。よろしく頼む、今出来る全力でかかってきなさい」

アルフの言葉に試験官は一瞬首を傾げるが我に返ったように頷くと
そう言い、二人はデュエルディスクを構える。

「デュエル!!」

「私の先攻、ドロー!」

掛け声の直後試験官がドローを行い、素早く手札を見るとその内の
一枚を手にとった。

「私は「ゴブリン突撃部隊」を攻撃表示で召喚! カードを三枚セ
ットしてターン終了です」

ゴブリン突撃部隊 攻撃力:2300

「僕のターン、ドロー」

「リバーズカード発動「最終突撃命令」! フィールド上の表側表
示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できません!」

ゴブリン突撃部隊

効果モンスター

星4/地属性/戦士族

攻2300/守0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示にな
り、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する

事ができない。

最終突撃命令

永続罨

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

いきなり永続罨の発動、しかしアルフは慌てる様子を微塵も見せずに落ち着いて手札を見た。

「……僕は「グリーン・ガジェット」を召喚し、効果発動。デッキから「レッド・ガジェット」を一枚手札に加えます。そして手札の「マシンナーズ・フォートレス」と「レッド・ガジェット」を捨て、墓地から「マシンナーズ・フォートレス」を特殊召喚！マシンナーズ・フォートレスは手札から機械族モンスターをレベル合計が8以上になるよう捨てる事によって手札または墓地から特殊召喚できます」

グリーン・ガジェット 攻撃力：1400

マシンナーズ・フォートレス 攻撃力：2500

グリーン・ガジェット

効果モンスター

星4/地属性/機械族

攻1400/守600

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

レッド・ガジェット

効果モンスター

星4/地属性/機械族

攻1300/守1500

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

マシンナーズ・フォートレス

効果モンスター

星7/地属性/機械族

攻2500/守1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

「さらに永続魔法「マシンナーズ・フロントライン機甲部隊の最前線」を発動！そしてバトル、マシンナーズ・フォートレスでゴブリン突撃部隊を攻撃、マシンナーズ・ブラスター！」

「リバーズカードを発動します、速攻魔法「収縮」！その効果によりマシンナーズ・フォートレスの元々の攻撃力を半分にします！」

「!?!」

マシンナース・フロントライン
機甲部隊の最前線

永続魔法

機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

収縮

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

マシンナース・フォートレス 攻撃力：2500 1250

「これで攻撃力は逆転しました、振り返ちです！」

「くっ！……でも、マシンナース・フォートレスの効果発動！このカードが戦闘によって破壊された時相手フィールド上に存在するカード一枚を選択し、破壊する。それにチェインして機甲部隊の最前線の効果発動、それにより僕はマシンナースの攻撃力2500以下で同じ属性である地属性の機械族「マシンナース・ギアフレーム」を攻撃表示で特殊召喚！そしてチェーン1のマシンナース・フォートレスの破壊効果により僕はゴブリン突撃部隊を破壊します！」

LP4000 2950

「ぐうっ！」

突然マシンナーズ・フォートレスの全長が半分程度に収縮し、その状態で放たれた小さな砲撃にゴブリン突撃部隊の一部が吹っ飛ばされたものの戦闘を行う分には問題なし、一瞬でマシンナーズ・フォートレスを取り囲んでぼこぼこにするがその次の瞬間アルフの場に新たなマシンナーズが姿を現し、そう思ったらマシンナーズ・フォートレスは自爆。ゴブリン突撃部隊を道連れにした。

マシンナーズ・ギアフレーム 攻撃力：1800

マシンナーズ・ギアフレーム

ユニオンモンスター

星4/地属性/機械族

攻1800/守0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

「そしてグリーン・ガジェットとマシンナーズ・ギアフレームでダイレクトアタック！」

「そうはいきません！ リバースカード発動「リビングゲッドの呼び声」！ 墓地から「ゴブリン突撃部隊」を攻撃表示で特殊召喚し

ます！」

ゴブリン突撃部隊 攻撃力：2300

リビングゲデッドの呼び声

永続罫

自分の墓地のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「つつ！ まき戻しにより攻撃を中止し、リバーズカードを一枚セツトしてターンを終了します」

「ふむ、私のターン。ドローです」

アルフは復活した部隊を見て息を飲むと攻撃を中止し、カードを二枚伏せるとターンを終える。それを聞いた試験官はふむと呟いてカードをドローし、それを見た。

「私は^{チェインソー・インセクト}「電動刃虫」を攻撃表示で召喚！ バトルフェイズに入ります！」

電動刃虫 攻撃力：2400

チェインソー・インセクト
電動刃虫

効果モンスター

星4 / 地属性 / 昆虫族

攻2400 / 守0

このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード1枚をドロウする。

「ゴブリン突撃部隊でグリーン・ガジェットを攻撃！」

「ぐうっ！ 機甲部隊の最前線の効果を発動！ グリーン・ガジェットの攻撃力1400以下の地属性機械族、「レッド・ガジェット」を攻撃表示で特殊召喚し、レッド・ガジェットの効果発動！ デッキから「イエロー・ガジェット」を手札に加えます」LP2950 2050

レッド・ガジェット 攻撃力：1300

イエロー・ガジェット

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族

攻1200 / 守1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

「ふむ……このターンで倒しきれぬわけでもなし、何も電動刃虫の攻撃でこれ以上あなたの手札を増やし逆転の可能性を増やす必要もないですね。バトルフェイズ終了、ゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備表示に変更されますが、最終突撃命令の効果により直後

攻撃表示に変更されます。私はカードを一枚セットしてターンを終了します」

「僕のターン、ドロー！ よし！ 僕はレッド・ガジェットとマシンナーズ・ギアフレームを生贄に捧げます！」

「なんですと!?!」

アルフの宣言に試験官が声を上げる。そして二体の機械が闇に包まれ、巨大な機械の球体がその場に具現する。

「巨大なる土星よ、今こそ汝起動の時！ 来い、「The big SATURN」!!」

その球体の内部からロボットののように頭が現れ、どこからともなく巨大な両腕が飛んでくる。そして最後に球体の周りに輪が具現した。

The big SATURN 攻撃力：2800

「いきます、SATURNで電動刃虫を攻撃！ アンガー・ハンマー!!」

「させません！ その攻撃宣言時にリバースカードオープン」聖なるバリア ミラーフォース」!! 相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊します!!」

The big SATURN

効果モンスター

星8 / 闇属性 / 機械族

攻2800/守2200

このカードは手札またはデッキからの特殊召喚はできない。

手札を1枚捨てて1000ライフポイントを払う。エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

相手がコントロールするカードの効果によってこのカードが破壊され墓地へ送られた時、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

聖なるバリア - ミラーフォース

通常罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

SATURNは浮遊している巨大な両腕をチェーンソーの顎を持つ昆虫に叩きつけようとしますがその一撃は聖なるバリアに防がれ、その衝撃を跳ね返されSATURNの身体にヒビが入り、その巨体が爆発する。

「……な、なんですと!?!」LP40000

爆発によって発生した煙のソリッドヴィジョンに包まれる中試験官はデュエル終了のブザーが鳴り響くのを聞き、直後自らのライフポイントがゼロになっている事に気づいて声を上げた。すると煙の向こうからアルフの声が聞こえてくる。

「SATURNの効果です。SATURNには相手がコントロールするカード効果によって破壊され墓地へ送られた時、お互いのプレイヤーはその攻撃力分のダメージを受けるという効果があるんです

「よ」

「し、しかし！ SATURNの攻撃力は2800、私のライフは4000なのでダメージを受けたとしても1200残ります！ そもそもそのダメージを受けたらライフポイントが0になり敗北するのは残りライフが2050であるあなたではないですか！？」

アルフの説明を聞いた試験官は驚愕の声でそう叫ぶ。そして煙が消えていきアルフの姿が試験官の目に映る。彼のフィールドには一枚のカードが翻っていた。

「SATURNが破壊され効果が発動した時リバースカードを発動しました。カウンタートラップ「地獄の扉越し銃」、その効果はダメージを与える効果が発動した時、そのダメージを相手に与える。これにより僕が受けるはずだったダメージ2800が丸ごと先生に移り、先生は2800×2、つまり5600のダメージを受けたというわけです」

地獄の扉越し銃

カウンター罠

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。自分が受けるその効果ダメージを相手に与える。

「な、なんとという恐ろしいコンボ……」

「これが僕の必殺即死コンボ、ダブル・インパクト。じゃ、僕の勝ちですね。ありがとうございました」

アルフの説明を聞いた試験官は顔をしかめながらそう呟き、アルフは不敵な笑みを浮かべて説明を終えることにこつと無邪気な微笑みを浮かべて続けてぺこりと頭を下げ、デュエル場を降りていった。そしてアルフはライ達の待つ席へと戻る。

「よっ。久しぶりに見たな、ダブル・インパクト」

「まさかいけるとは思わなかったけどね。やっぱりこのコンボ決まると気持ちいいや」

ライの言葉にアルフはあははと笑いながら返して席に座る。と次にエルファイが口を開いた。

「さて、私とアルフが勝つたんだから後はライだけよ。一人だけ不合格になるなんて止めてよね？」

「分かってるって」

エルファイの言葉にライが笑いながら返していた時、放送が聞こえだす。

「受験番号65番！」

「お、来た来た、んじゃ行ってきまーす」

それを聞いたライは自分の受験票を確認するとヒラヒラと手を振って言いながら席を立ち、デュエル場へと向かう。

「受験番号65番、空時ライ！ よろしくお願いしますー！ー！」

「空時……すまないが、君には兄弟がいるかな？」

ライが元気良く名乗ると試験官が尋ね、それにライはうんと頷いた後気づいたように笑う。

「ああ、先生エルフィとアルフの相手をした人だよな？ アルフは俺の双子の弟で、エルフィは幼なじ……従姉弟なんだ」

「なるほど……面白い偶然もあるものだ」

「へへへっ、んじゃ空時三人三連勝といかせてもらいますね！」

「そうはいかない！ 今出来る全力でかかってきなさい、私も今出来る全力でそれを撃ち砕く！」

ライの説明を聞いた試験官は納得したように頷き、ライはへへっと笑いながらそう返す。しかし試験官もふっと笑ってそう言う二人はニヤリと笑い合ってデュエルディスクを展開する。

「デュエル……！」

そして二人の声が響き渡り、直後カードをドロしたのはライだった。

「先攻はもらうね！ ドロー……俺は「クリッター」を守備表示で召喚し、カードを一枚セットしてターンを終了します」

クリッター 守備力：600

クリッター

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族

攻1000 / 守600

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

ライの場に三つ目で毛むくじやらの悪魔が姿を現し、その後ろに一枚のカードが伏せられる。それから彼はターンを終了した。

「私のターン、ドローです。私は「ゴ布林突撃部隊」を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズに入ります！ ゴ布林突撃部隊でクリッターを攻撃！」

ゴ布林突撃部隊 攻撃力：2300

ゴ布林突撃部隊

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族

攻2300 / 守0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「ちつ……墓地に送られたクリッターの効果発動！ このカードが墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを一体手札に加える。俺は「魔轟神ガルバス」を手札に加える！」

魔轟神ガルバス

効果モンスター

星4 / 光属性 / 悪魔族

攻1500 / 守 800

手札を1枚墓地へ捨てて発動する。

このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

「ふむ……バトルフェイズ終了時にゴブリン突撃部隊は守備表示に変更となります。私はリバーズカードを二枚セットして、ターンを終了します」

ゴブリン突撃部隊 守備力：0

「っと待った！ その前のエンドフェイズにリバーズカードオープン速攻魔法「終焉の焰」！ 俺の場に黒焰トークンを二体特殊召喚する！ このトークンは闇属性モンスター以外の生贄召喚の生贄には出来ない」

黒焰トークン×2 守備力：0

終焉の焰

速攻魔法

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。

自分フィールド上に「黒焰トークン」（悪魔族・闇・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「なるほど、改めてターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！ そして二体の黒焰トークンを生贄に捧げる！」

試験官はライの場で小さく燃える黒い焰の悪魔を見るとふむと頷いてターンを終え、それを聞いたライは力強くカードをドローした後間髪入れずにそう宣言する。それと同時に黒い焰がさらに巨大な黒い球体に吸い込まれ、球体も炎を放ち始める、それはまるで小さな黒き太陽のように。

「汝は没する事無く、無限に出づる至高の太陽！ 闇より昇れ！！

「The supremacy SUN」！！！！」

The supremacy SUN 攻撃力：3000

The supremacy SUN

効果モンスター

星10/闇属性/悪魔族

攻3000/守3000

このカードはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、手札を1枚捨て

る事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

ライの口上と共に黒い太陽の中から太陽の名を冠する悪魔がその姿を現し、ライのフィールドに降り立つ。

「いくぜ、SUNでゴブリン突撃部隊を攻撃、ソーラー・フレア！」

「この瞬間、リバーズカードを発動します！ トラップ発動「聖なるバリア ミラーフォース」！ そのモンスターには消えてもらいます！」

聖なるバリア・ミラーフォース
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「うおおおおっ！！？？」

SUNの放った太陽の炎は聖なるバリアに跳ね返されてSUN自身を燃やし尽くす。それにライは驚いたように声を上げた。

「つちやー、ターンエンド……」

「ふふふ、私の場に存在するモンスターはゴブリン突撃部隊のみ、そしてゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備表示に変更された次のターンのエンドフェイズ時まで表示形式の変更は不能。それな

らば安心とでも思いましたか？ 甘いですね、そちらのエンドフェイズにリバーズカード発動、永続罠「最終突撃命令」！！ フィールド上全てのモンスターは攻撃表示となる、つまりゴブリン突撃部隊も攻撃表示に変更されます！」

ゴブリン突撃部隊 攻撃力：2300

「わお……」

最終突撃命令

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

攻撃後の休憩状態、守備表示へととなっていたゴブリン達は突然の突撃命令を聞いて攻撃状態へと移り、それを見たライはそう呟く。ターンは既に試験官へと移っていた。

「私のターンです、ドロー！……私はチェインソー・インセクト「電動刃虫」を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズに入ります！ これで終わりですね、ゴブリン突撃部隊でダイレクトアタック！」

電動刃虫 攻撃力：2400

チェインソー・インセクト
電動刃虫

効果モンスター

星4 / 地属性 / 昆虫族

攻2400/守0

このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード1枚をドローする。

「ぐうっ！！ だが、手札の「冥府の使者ゴーズ」の効果発動！

俺の場にカードが存在しない時に相手のカードによってダメージを受けた時、手札から特殊召喚する！ そして戦闘ダメージを受けた事による特殊召喚の場合受けた戦闘ダメージと同じ数値の攻撃力・守備力を持つカイエントークンを特殊召喚する！ 冥府より現れる、ゴーズ！ カイエン！」LP4000 1700

冥府の使者ゴーズ 攻撃力：2700

冥府の使者カイエントークン 攻撃力：？ 2300

冥府の使者ゴーズ

効果モンスター

星7/闇属性/悪魔族

攻2700/守2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、

相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」

(天使族・光・星7・攻/守?)を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

カードの効果によるダメージの場合、
受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

「ふむ。ならば……電動刃虫でカイエントークンを攻撃します！」

「ちっ、電動刃虫の効果によりダメージステップ終了時にカードを
一枚ドロ―」LP1700 1600

「バトルフェイズ終了、ゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備
表示になります。その直後最終突撃命令の効果により攻撃表示に変
更されます。私はリバースカードを一枚セットしてターンを終了し
ます」

「俺のターン、ドロ―！」

試験官はリバースカードを一枚セットするとターンを終え、それを
聞いたライはカードをドロ―する。するとライはデュエルディスク
を縦に構えてにやりと笑った。

「太陽は一度沈んでも次の日にはまた昇る。それはSUNにも受け
継がれているんだ」

「なんですと!?!」

「SUNの効果発動！ 破壊された次のスタンバイフェイズ、手札
を一枚捨てる事により、このカードは墓地から特殊召喚される！
再び立ち昇れ、「The supremacy SUN」!」

The supremacy SUN 攻撃力:3000

ライが手札を一枚捨てると共にフィールドに再び黒い太陽が浮かび上がり、その中からSUNが姿を現しフィールドへと降り立つ。

「まだまだ！ 俺は「魔轟神ガルバス」を攻撃表示で召喚し、手札を一枚捨ててガルバスの効果発動！ ガルバスの攻撃力以下の守備力を持つ、相手フィールド上の表側表示モンスター一体を破壊する。守備力0の電動刃虫を破壊！」

魔轟神ガルバス 攻撃力：1500

「ぐうっ！！！」

ライの場に現れた悪魔は手に持っていた棘付き鉄球の鎖を振り回し、鉄球を電動刃虫に叩きつけ押し潰す。

「いくぜ、冥府の使者ゴーズでゴブリン突撃部隊に攻撃！」

「ぐうっ！！」LP4000 3600

「さらに、魔轟神ガルバスでダイレクトアタック！」

「ぐふうっ！！」LP3600 2100

冥府の使者が手に持っていた剣一本でゴブリンの部隊を殲滅し、そこにガルバスが試験官目掛けて鉄球を叩きつける。

「これでトドメ！ SUNでダイレクトアタック！！ ソーラー・フレア！！！！！」

「ぐおおおおおつ!!!」LP21000

ライの指示と共に放たれた光線が試験官に止めをさし、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「っしやー！ 空時三人三連勝達成！ ありがとうございます！
！」

ライは右手を掲げてそう叫び、ぺこりと頭を下げてお礼を言ってからデュエル場を降り、席へと戻っていく。

「いえーいつ！ 三連勝達成だな！」

「全くもう、ゴーズがあるとは思ってたけど冷や冷やしたよ」

「もしゴブリンをリリ……生贄に偉大魔獣ガーゼットでも召喚されたらどうするつもりだったの？」

「ま、そこはそれ。実は手札にクリボーいたから、万が一があっても一回は耐えられる計算だったよ」

ライの能天気な声にアルフとエルフィはため息混じりに返し、エルフィの言葉にライはたはたと笑ってそう返す。それから三人が色々と話していると突然聞こえてきた声が耳に入る。

「いけ、フレイム・ウィングマン！ 古代の機械巨人に攻撃！ スカイスクレイパー・シューツ！」

「マンマミーヤ！ 私が古代の機械巨人が!!!」

「「「あ！！！」「」」

話し込んでいたせいで十代が来ていたのに気づいていなかったどころかデュエルすら見逃していた。三人が気づいた時には既にデュエルは終了、十代はいえーいっとガッツポーズを取っていた。

「あっちゃー……うっかりしてたね」

「不覚だったわ。話に夢中で周りの気配に気を回すの忘れてた」

「ま、しょうがないだろ。原作通り勝った事だし多分皆合格だろ、十代と話するのはアカデミアに入ってからにしようぜ」

アルフの言葉にエルフィが残念そうに言うと言いつつライは両手を後ろに回しながら続ける。それから三人は入学実技試験終了のアナウンスを聞くと試験場を後にし、家に帰っていった。

第一話 入学試験デュエル（後書き）

第一話は入学試験デュエル、ちなみにこの小説にはGX世界観ながらシンクロが普通に出ます。理由はメリオルがカードデザイナーとしてインダストリアル・イリユージョン社に入社しているため。ちなみにスターダストやレッド・デーモنزのような5D'sの特別なカードは自重しますがZEXALのキーカードことNo.1は一切の自重無く使用する予定なのでご了承ください。

……にしても疲れた……流石に第一話から三連戦はきつい……。

レオ「しかも試験官は全員一緒という手抜き具合」

三人も思いつかねえもん、攻撃力の高いモンスターでビートダウン、分かりやすいでしょ？ さあ次回から学園生活のスタートです。

レオ「さあ今回はどんなプレイングミスをしてるかな？」

しつけえよ!!! ま、まあ、それでは！

第二話 入学、そして顔合わせ

「うおー！！ すっげー速えー！ ヘリコプターってこんな速いのかー！？」

「ライ！ ライ！ あれ鯨じゃねえか！？」

「え！？ どこだどこだ！？」

「ほらあそこあそこ！ ってあーくそつ、見えなくなった！！」

「……兄さんはもつ……」

「恥ずかしい……」

アカデミアへと向かう高速ヘリ、デュエルアカデミアへの入学試験という狭き門を潜り抜けた新入生はこの船に乗り、太平洋の孤島に設置されたデュエルアカデミアへと続々と向かっていた。本来ならば新たな生活に対する期待や不安、緊張が少なからず現れるであろうそんな中でライは海の上を疾走する高速ヘリにテンションを上げており、その近くに座っていた少年 この物語の主人公である遊城十代。同じヘリに乗った時似たもの同士なのかライと一瞬で意気投合していた と一緒に窓の外を見て騒ぎまくり、アルフとエルフィは、アルフはため息をつきエルフィは両手で顔を押しさえながらそう呟いていた。

「まあ、人懐っこくて誰ともすぐ仲良くなれるのが兄さんの、ライのいいところだよな」

「確かに」

アルフは自分達の後ろに乗っているライの方を見てくすつと笑いながら続け、エルフィも微笑みながらそう返した。

それからヘリはアカデミアに到着し、新入生は校長先生から挨拶を受ける。それが終わって新入生は制服に着替え、学園で使う特別端末PDAを貰って外に出る。そして十代はピツピツとPDAを操作しながら口を開いた。

「ふーん、これから俺達が生活する寮は三つに分けられてるのか…俺はオシリスレッド、ライは？」

「俺もレッドだった」

「あ、僕もレッドだったツス。えと、十代君とライ君だったっけ？丸藤翔ツス、よろしくね」

「おう。んでアルフは？」

「レッドだよ。イエロー行けたと思ったのに、思ったよりレベル高いのかな？」

十代は自分の寮を確認してからライに尋ね、ライもそれに返すとその近くにいた少年 丸藤翔 が声を出す。それにライはこくと頷いて返してからアルフに尋ね、それにアルフも微笑みながら返す。

「ああ、一番君」

「やあ二番、お前もレッドか？」

するとそこに黄色い制服を着た少年が現れ、十代に声をかける。それに十代が尋ねると彼は自分の制服に手を当てた。

「いや、俺はこの制服で分かるだろう？ 俺はラーイエローだ」

「制服？ ああ、この色ってそういう意味なのか？」

少年の言葉に十代は自分の制服を見ながらそう呟き、それに少年は頷いた。

「まあな。ああ、名乗ってなかったな。俺は三沢大地、よろしく頼む。それにしても、遊城十代、空時ライにその弟の空時アルフだったな？ 君達がレッドだというのが不思議だよ」

「ん？ どういう意味だ？」

「ああ、気にしないでくれ。ああそれと君達の寮はあっちの方だ、では失敬」

少年 三沢の言葉に十代が首を傾げ、それを聞いた三沢は少し笑いながらそう言った後一つの方向を指差し、それから歩き去っていく。それから彼らの近くに立っていた少女 エルフィも歩き出す。

「じゃあ、私も女子寮に行くからこの辺で。また後でね」

「おう。道中気をつけるよ」

「はいはい。じゃまたね」

エルフィの言葉にライがそう言うのと彼女はくすくすと笑いながら返して歩き去る。それを一行が見送ってから十代が口を開いた。

「んじゃ、俺達も行くか。えーっと、三沢が言ってたのはあっちだったな。行くっぜ」

十代がそう言って走り出すとライやアルフ、翔も急いでその後を追いかけて走り出す。それからメンバーの前に広がったのは……。

「えーっと……ここがオシリスレッドの寮？」

最初に口を開いたのは翔、彼らの目の前にあったのはどっからどう見ても築十数年は立ってそうな外見のボロイ二階建ての木造アパートだった。

「うわあ、アニメで飽きるほど見てたけど……」

「生で見ると凄いな……」

「え？ どういう意味ツスか？」

「あ、いやいやこつちの話。えと、ほら、ホームページか何かに乗ってなかった？ それと実際に見るとじゃやっぱ違うなーって」

「へー……」

アルフとライの呟きを聞いた翔が不思議そうに尋ねるとアルフはあははと笑いながら誤魔化し、それを聞いた翔は首を傾げる。

「でも俺は好きだな、眺めもいいし……おっ！ 鯨だ！」

「マジか!？」

階段を上がり、寮のすぐ後ろに広がる海を見ながら十代が言い、声を上げるとライがダダダと階段を駆け上がる。

「えーっと、ああ、翔君は十代君と同じ部屋だね。えーっと……ああ、あそこだ。三人相部屋で、前田隼人君っていう人と相部屋なんだって」

「ありがと。アルフ君は僕達の隣、あの隅の部屋でお兄さんと同部屋なんすね。でも少し狭いみたいッス」

「建築費の関係で一つだけ二人部屋のスペースになっちゃって、僕達は兄弟なんだからってそこを割り当てられたみたい。まあ実家でも二人部屋だったし慣れてるよ」

アルフがPDAに載っている部屋の割り当てを見てそう言うと翔はお礼を言い、そのお返しにか彼らの部屋を調べる。その言葉にアルフは笑いながら返し、翔も「そうッスか」と返した。それから海を見て歓声を上げている十代とライをそれぞれ翔とアルフが連れて行き、それぞれの部屋に入った。

「ふー。二人部屋か、下手に他人に入られなくてよかったって言うべきか？」

「ま、そうかもね。おちおち秘密の話も出来やしないし」

ライとアルフは部屋に荷物を置きながらそう話し合う、と部屋のド

アががちゃつと開けられた。そこに立っていたのは元気一杯の十代とずくと落ち込み状態の翔だった。

「ライ！ アルフ！」

「おう十代、どした？」

「探検しようぜ、探検！」

「おう！」

十代の提案にライは笑いながら返し、それから四人は学校の方に歩きながらライと十代はデュエル談義で盛り上がり、アルフは後ろでそれをちらりと見た後翔の方を見た。

「で、翔君はなんでそんなに落ち込んでるの？」

「さつき、相部屋の隼人君に聞いたんだけどね、レッド寮のレッドは危険域レッドゾーンって意味で、高等部から入学してきた中で成績不振者を集められたんだってさ……あ、オベリスクブルーは中等部からの成績優秀生、ライイエローは高等部入学者の中で成績優秀な人を集めたんだってさ……つまり、僕達は成績不振者のドロップアウトって意味なんすよ……」

アルフの問いに翔が落ち込みながら返す。するとそれにアルフはくすくすと笑った。

「な、何が可笑しいんすか！？」

「だって、ブルーはともかくとしてもイエローとレッドの違いなん

てつまりはたかだか入学試験の結果でしょ？ 入ったもんが勝ち、レッドが最低の寮って事は逆に言えばこれ以上は下がらない。後は上がっていけばいいだけだよ。日本にはいい言葉がある……「窮鼠猫を囓む」」

「僕達ネズミ!？」

「冗談だよ。背水の陣ってよく言うじゃない、ほら前を見てみなよ、十代君なんて全然気にしてないっぽいよ」

突然笑い出したアルフに翔が叫ぶとアルフは笑いながらそう言い、その最後の言葉に翔が声を上げるとアルフは冗談だよと付け加えてから続け、翔は前を見る。確かに自分と同じ話を聞いていたはずの十代は全然落ち込む様子を見せていなかった。それを聞くと翔はくすりと笑う。

「そうツスね……ありがとう、アルフ君」

「どういたしまして」

翔のお礼の言葉にアルフは微笑みながら返し、と翔はそれを驚いたように見た。

「どうしたの?」

「なんか、アルフ君って……笑うと女の子みたいっすね」

「……」

それを見たアルフが逆に驚いたように尋ねると翔は笑いながら返し、

それを聞いたアルフが今度は落ち込む番だった。

「それ、昔っから言われるんだよ……中学校の学園祭で喫茶店をずる時とか僕ウケ狙いで女装させられたんだ、しかも家族以外同じ学校の生徒すら誰も僕だと気づかない有様、フッフッフ……」

「わーごめんツス！ 僕が悪かったツスー！！」

アルフの背後に気のせいかな黒いオーラが宿り、それに翔は大慌てで両手を合わせて謝り始める。それからなんだかんだでアルフの機嫌が治った後一行はデュエル場へとやってくる。

「あ、ライ」

「お、エルファイ！」

するとデュエル場に入るところで一旦別れていたエルファイと合流、彼女の声かけにライも右手を振って返す。すると彼女の隣に金色の髪を長く伸ばした綺麗な少女が立っているのに気づいた。

「エルファイ、知り合い？」

「うん。幼馴染、じゃなかった。従姉弟のライとアルフ、ここに来る途中で知り合った十代君と翔君」

「そう。初めまして、私は女子ブルー寮所属の天上院明日香。よろしく」

少女 明日香の言葉にエルファイは頷いて彼らを紹介し、それを聞いた明日香は改めて名前を名乗る。それにレッドメンバーが「よろ

しく」と返した。

「んじゃさ、そこデュエル場みたいだし一回デュエルやるうぜ！
俺一番乗りー！」

「あ、ずりい！」

十代は言うが早いかデュエル場に駆け上がる。それを見たライがそ
う叫んでその後を追い、残るメンバーは顔を見合わせて苦笑すると
デュエル場が上がっていった。

「あれ？」

するとアルフはすぐに気づく。十代が思いっきりブルー男子の生徒
と口喧嘩を行っていた。

「なんでだよ！？ 俺達もこの学校の生徒だぜ！ なんでここ使っ
ちやいけないんだよ！？」

「ここはオベリスクブルー専用リング、言わば俺達のようなエリー
トの聖域なんだ！ お前ら如きオシリスレッドの奴が来たら空気が
汚れるだろうが！」

「その通り、そこを見る！」

十代の声にブルー生徒Aが高説、続けてブルー生徒Bがデュエル場
の入り口の壁を指差す。それにその場にいた全員が顔を上げるとそ
こにはオベリスクの巨神兵の顔らしきエンブレムがあった。

「あ、ほんとだ」

「これは知らなかった僕達が悪いツスね。アニキー、寮に帰るー」
それを見たアルフが呟くと翔は納得したように頷いて十代を呼ぶ。
するとその途端ブルー生徒Aが目を見開いた。

「あつ、よく見るとお前は、クロノス教諭を倒した遊城十代!？」

「え？ 俺のこと知ってんの？」

「ま、万丈目さん！ 大変です！ 受験番号110番、遊城十代です！」

ブルー生徒Aの言葉に十代がきょとんとするとブルー生徒Bが上方を見て声を上げる。すると客席に寝転がっていた黒髪の少年が起き上がり、気だるそうな目で十代達を見た。

「……!？」

それを見た瞬間ライ達三人に違和感が走る。そして万丈目と呼ばれた少年はデュエル場に下りると十代を見た。

「……お前が遊城十代か。クロノス教諭を実技試験で破ったという噂は聞いている」

「へへっ、実力さ」

万丈目の言葉に十代はぐっとサムズアップをしながら返し、それを見た万丈目はやりと微笑を浮かべた。

「その実力、見せてもらう。明日の実技授業で俺と戦え。デュエルの場については後で教える。人目のつく場所でやると無粋な邪魔が入らないとは限らんからな」

万丈目は心なしか背後のブルー生徒に気を向けながらそう言い、それに十代はああと頷いた。

「分かった。んじゃ俺のPDAのアドレス教えとくよ」

「ああ」

十代と万丈目はそう言い合うとPDAを取り出して十代は万丈目のPDAにアドレスを送信する。それが終わると明日香が口を開いた。

「ところで、そろそろ新入生歓迎会の時間よ。戻りましょう」

「おっ、そんなのもあるのか？ んじゃ行こうせ、翔、ライ、アル
フ」

「あ、うん」

明日香の言葉に十代は顔を輝かせ、翔達に言うがそれに頷いたのは翔のみ。ライとアルフはエルフィに目配せしており、エルフィもうんと頷くとPDAを取り出した。

「ああ、俺達まだエルフィとアドレス交換してないからさ。先に戻
つてて」

「あ、そうか。んじゃ先に行くぜ」

「じゃーねー」

ライの言葉に十代と翔はそう言って走り去っていく。それからエルフィは明日香に話しかけた。

「明日香、私ライ達とアドレス交換ついでに話したいことがあるから。先に戻ってて」

「ええ」

エルフィの言葉に明日香はうんと頷き、三人はデュエル場を出て行く。それから明日香は万丈目の方をちらりと見た。

「遊城十代、あのクロノス教諭を破ったという噂は本当のようね」

「ああ、それも試験用デッキではなくクロノス教諭本来のデッキを破ったとまで言われている。教諭が手加減したという可能性ももちろんあるが、実力は確かだろう」

「ふうん、面白い子みたいね。遊城十代……」

明日香の言葉に万丈目はにやりと笑いながら返し、それを聞いた明日香はくすくすと笑いながら言ってから歩き出した。

「じゃあ、私もそろそろ戻るわ」

「ああ」

明日香がそう言って歩き出すと万丈目も踵を返して歩き出す。

少し時間を戻してライ達、彼らはデュエル場を出ると人目のない場所に移動して口を開いた。

「おい、見たかあの万丈目」

「うん、確か初期の万丈目ってレッドの生徒をドロップアウトボーイって蔑んでる凄い嫌味なキャラだったはず、なのにこの万丈目ってまるで漫画版みたい……」

「まさかこいつって漫画版GX？ あ、でも十代君はアニメ版のフレイム・ウィングマンを使ってたし……」

三人はそう口々に言い、最後にエルフィが言うと黙り込む。そしてライは髪をかきながら口を開いた。

「流石に判断材料が少なすぎるな。一旦寮に戻ろう、アドレスは交換して、何か分かったらメールを送ろう」

「了解」

ライの言葉に二人は頷き、三人は互いにアドレスを交換し合う。そしてそれを確認するとライが口を開いた。

「んじゃ、解散。明日の十代と万丈目のデュエル、俺達も観戦させてもらおうぜ」

「そうだね」

ライの言葉にアルフが返し、エルフィはふふっと笑う。それからエルフィは女子寮に、ライとアルフはレッド寮へと向かう。その道中

だった。

「アルフ」

「なあに？」

「分かってるだろ？」

ライの声にアルフがわざとらしく返すとライは静かに返し、アルフも当然というように頷いた。

「あのブルー生徒二人でしょ？ 原作ではなかったけどオリジナルになればどうなるか分からない。万丈目君の気の張りようから考えてブルーの生徒がレッド相手に負けるなんて許さないとかでブルーの生徒がデュエル中に、特に十代君が優勢になれば乱入してくる可能性は想定しておくべきだね」

「ああ。まあそういうことだ、エルフィにも連絡取つとかないとな」
アルフの予想にライは頷き、PDAをちらりと見た。もう既にレッド寮は姿を見させている。

それから新入生歓迎会が行われるがレッド寮の食事は滅茶苦茶質素、何せ白米に味噌汁、めざしに沢庵という粗食だ。レッドの生徒は啞然としていて全く手をつけようとしなない。

「あ、美味しい」

「あ、ほんと。この沢庵よく漬けられてるね」

「お、ほんとだ美味え！」

「ちょ、ちよつとライ君アルフ君アニキ、まずいっすよ……まだ先生活してる途中」

「あはは、小さい事は気にしないのニヤー」

しかしライとアルフ、十代はあっさり食っており、同席の翔が注意していると教師でありこの寮の寮長こと大徳寺は三人を見下ろしながら微笑みの表情でそう言う。その妙な威圧感に三人は冷や汗を流していた。

それからさつさと食事を終えたライとアルフは部屋に戻り、エルフイに連絡を取る。

「ライ、どうしたの？」

「お、凄い。テレビ電話みたいだ。ああエルフイ……騒がしいけど歓迎会中か？」

「まあね。でもまだちゃんとした知り合いは明日香くらいしかいないし、その明日香は他の女子に囲まれてるから。私に注意を払ってる人なんていないし大丈夫、それより何？」

PDAの画面に映ったエルフイの顔を見たライは感嘆の声を上げた後、画面の方からざわざわという声が聞こえてくるのに気づいて尋ねる。それにエルフイは頷き、周りを見る。エルフイは右手にグラスにジュースを入れた状態で壁に背を預け左手でPDAを持った状態、明日香は女子に囲まれてキヤーキヤー言われており、他の生徒も食事を取っているか話しているか。ライから連絡が来てわざと

はいえ孤立しているエルフィに話しかけてくる相手も今のところ見受けられなかった。

「ああ、明日のデュエルだけど頼みたい事があるんだ……」

それからライはエルフィに頼みたい事を言い、それを聞いたエルフィはふうんと頷く。

「分かったわ。任せておいて」

「サンキュ、んじゃまた明日な」

「ええ。お休み」

エルフィがそれを了承するとライは返し、それにエルフィもそう挨拶すると電話を切った。

「ライ？」

「ひゃあっ!？」

すると突然声をかけられ、エルフィは驚いたように飛び上がる。いつの間にか明日香が近くに立っており、その横には茶色い髪の子と、黒い髪の女子がいる。

「ああ、紹介するわね。枕田ジュンコに浜口ももえ」

「よろしく」

「よろしくお願いいたしますわ。ところで先ほど明日香さんがライと尋ねていましたが、彼氏さんですか？」

「えっ！？ あ、いや、その……」

明日香の紹介を受けた茶髪の女子　ジュンコは軽く挨拶し、黒髪の女子　ももえもにこりと笑って挨拶した後目を輝かせてずいっとエルフィに迫る。その言葉を聞いたエルフィは顔を赤く染めてPDAを自分の後ろに隠す。

「彼氏さんなのですね！？　一体どのような殿方なのですか！？」

「え、いや、だからそのっ！」

ももえがグイグイと迫り、エルフィは慌てたように後ずさりする。それからジュンコも悪ノリし、しばらくエルフィは二人に弄り倒され明日香はその光景を見て腕組みをしながら少し呆れたように微笑んで、もうと息をついていた。

翌日、十代と万丈目は、万丈目が指定した森林の中にある広場で対峙していた。その近くには二人を除けば十代が連れてきたライ、アルフ、翔の姿しかない。

「いくぞ、遊城十代！　俺は、絶対に負けん！」

「ああ！　全てをぶつけ合おうぜ、勝ち負けはその後だ！」

二人はそう言い合つとデュエルディスクを展開する。

「デュエル……！」

そして二人の声が重なり、デュエルが幕を開けた。

第二話 入学、そして顔合わせ（後書き）

《次回予告》

翔「ついに僕達もデュエルアカデミアの生徒ツス！」

ライ「ああ、五年も待ってやっと物語のスタートだな」

翔「五年？」

アルフ「こつちの話だよ、気にしないで。そして入学して早々十代君と万丈目君のデュエルだね」

翔「うん！ 幕を開けたアニキと万丈目君のデュエル、でもアニキのHEROデッキに勝てる相手なんているわけないツス！……ってあれ？ ライ君もアルフ君もどこ行くの？ アニキのデュエルの決着見逃しちゃうツスよ？……次回！ 「十代VS万丈目、そして空時兄弟の暗躍！」！！」

ライ・アルフ「デュエルスタンバイ！！！」

翔「それシリーズが違うツス！」

とりあえず、なんとなくアニメ＋漫画な雰囲気になってます。あ、でも十代に漫画版E・HEROを使わせる予定はありませんから安心してください。まあ魔法・罫に関しては分かりませんがね。さてと……ま、それでは。

第三話 十代VS万丈目、そして空時兄弟の暗躍

「デュエル!!!」

実技授業の時間、デュエルアカデミアに広がる森林の中、そこで十代と万丈目はデュエルを行う。その宣言とも言える掛け声の後万丈目が声を出した。

「俺が先攻を貰う！ ドロー！」

その言葉と共に万丈目はカードをドローし、手札を吟味するとその内の一枚を手取る。

「俺は「マスクド・ドラゴン仮面竜」を守備表示で召喚！ カードを一枚セットしてターンエンドだ」

仮面竜 守備力：1100

マスクド・ドラゴン
仮面竜

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族

攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

万丈目の場に一体の竜が姿勢を低くした状態で現れ、その後ろに一

枚のカードが伏せられる。

「俺のターン、ドロー！……俺は「E・HERO スパークマン」を攻撃表示で召喚し、装備魔法「スパークガン」をスパークマンに装備！」

E・HERO スパークマン 攻撃力：1600

十代の場に光のHEROが現れ、その右手に銃が握られる。

E・HERO スパークマン

通常モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族

攻1600 / 守1400

様々な武器を使いこなす、光の戦士のE・HERO。
聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。

スパークガン

装備魔法

「E・HERO スパークマン」にのみ装備可能。

自分のターンのメインフェイズ時に表側表示モンスター1体の表示形式を変更する事ができる。

この効果を3回使用した後、このカードを破壊する。

「スパークガンの効果発動、俺のターンのメインフェイズに表側表示モンスター1体の表示形式を変更する事が出来る！俺は仮面竜の表示形式を変更させ、スパークマンで仮面竜を攻撃！スパークフラッシュ！」

仮面竜 守備力：1100 攻撃力：1400

スパークマンが放つ聖なる輝きスパークフラッシュが仮面竜を破壊する、が万丈目は特に痛くないというような平然とした表情をしていた。

「仮面竜の効果発動！ このカードが戦闘によって破壊された時、俺のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを一体特殊召喚する。俺は攻撃力1300の「洞窟に潜む竜」を守備表示で特殊召喚！」 LP4000 3800

洞窟に潜む竜 守備力：2000

洞窟に潜む竜

通常モンスター

星4 / 風属性 / ドラゴン族

攻1300 / 守2000

洞窟に潜む巨大なドラゴン。

普段はおとなしいが、怒ると恐ろしい。財宝を守っていると伝えられている。

「くっ、俺はリバーズカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー……俺は洞窟に潜む竜を生贄に捧げ、「マテリアルドラゴン」を攻撃表示で召喚！」

マテリアルドラゴン 攻撃力：2400

マテリアルドラゴン

効果モンスター

星6 / 光属性 / ドラゴン族

攻2400 / 守2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、ライフポイントにダメージを与える効果は、ライフポイントを回復する効果になる。

また、「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、手札を1枚墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

大人しい竜が光に包まれ、その中から金色に輝く竜が姿を現し、咆哮を上げる。

「いくぞ、マテリアルドラゴンでスパークマンを攻撃！」

「リバースカードオープン、「攻撃の無力化」！ 攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「ちいつ！ ターンエンドだ！」

マテリアルドラゴンが放ったプレスは時空の穴に飲み込まれて消滅し、それを見た万丈目は舌打ちを叩いてターンを終了する。

攻撃の無力化

カウンター罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「俺のターン、ドロー！ よし、俺は魔法カード「融合」を発動！
手札のフェザーマンとバーストレディを融合！」

「来るッス！」

風のHEROと炎のHEROが混ざり合い、新たなHEROを生み出す。

「来い、「E・HERO フレイム・ウィングマン」！！」

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻撃力：2100

「ハアアアアアッ！！！」

風と炎の力を持つHERO、フレイム・ウィングマン。彼は炎と風を纏って雄叫びを上げると十代のフィールドに降り立った。

E・HERO フェザーマン

通常モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族

攻1000 / 守1000

風を操り空を舞う翼をもったE・HERO。

天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。

E・HERO バーストレディ

通常モンスター

星3 / 炎属性 / 戦士族

攻1200 / 守800

炎を操るE・HEROの紅一点。

紅蓮の炎、バーストファイヤーが悪を焼き尽くす。

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HERO フレイム・ウィングマン

融合・効果モンスター

星6 / 風属性 / 戦士族

攻2100 / 守1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「スパークガンの効果発動、マテリアルドラゴンの表示形式を変更するぜ！そしてバトルフェイズ、フレイム・ウィングマンでマテリアルドラゴンを攻撃！フレイム・シュートオー！！」

マテリアルドラゴン 攻撃力：2400 守備力：2000

フレイム・ウィングマンの右手、竜の頭から炎が発射され、雷の銃により防御の構えになってしまったマテリアルドラゴンに迫る。

「リバーズカードオープン「バーストブレス」！ 俺の場のドラゴン一体を生贄に捧げて発動し、生贄に捧げたドラゴンの攻撃力以下の守備力を持つフィールド上のモンスターを全て破壊する！」

しかしその炎が当たる前にマテリアルドラゴンは己の生命力全てを賭けたブレスを放ち、そのブレスに十代の場のヒーローが全て焼き尽くされる。お互いの場が全滅状態だ。

「……くそつ、俺はモンスターをセットし、ターンを終了するぜ」

十代は残る一枚の手札だったモンスターカードを場に伏せるとターンを終了した。

簡易状況説明

十代：LP4000 手札零枚

フィールド：モンスター一体裏側守備表示 伏せカードなし

万丈目：LP3800 手札四枚

フィールド：モンスターなし 魔法、罨なし

「手加減はしないぞ……俺のターン、ドロー！」

万丈目はそうとだけ言つとカードをドローし、にやりと笑みを浮かべる。

「俺は「ランス・リンドブルム」を攻撃表示で召喚！ ランス・リンドブルムで守備モンスターを攻撃、リンドブルムは守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力をリンドブルムの攻撃力が超えていればその差の数値分のダメージを相手プレイヤーに与える！ ゆけ、ランス・リンドブルム！！」

ランス・リンドブルム 攻撃力：1800

万丈目に場に現れたのはランスを持った竜人、そして万丈目の指示を聞くと竜人は十代の場のモンスター目掛けて突進し、十代の場のモンスターが姿を現す。

「俺の守備モンスターは「メタモルポット」！ そのリバーズ効果が発動し、互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たに五枚のカードをドローする！ ダメージは受けちゃったけど一気に五枚ドローだぜ！」 LP4000 2800

メタモルポット 守備力：600

「ちっ！」

十代の場に現れた壺がお互いの手札を全て吸い込み、新たに五枚の手札を彼らに向けて吐き出す。零枚の手札が五枚になった十代はともかく万丈目は手札を捨てる羽目になったせいか表情が険しい。

ランス・リンドブルム

効果モンスター

星4 / 風属性 / ドラゴン族

攻1800/守1200

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

メタモルポット

効果モンスター

星2/地属性/岩石族

攻 700/守 600

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロースする。

「くっ……俺はカードを二枚セットし、ターン終了だ」

「俺のターン、ドロース！ よし、俺は「貪欲な壺」を発動！ 墓地のモンスター、スパークマン、フェザーマン、バーストレディ、メタモルポット、そしてフレイム・ウィングマンをデッキに戻してカードを二枚ドロース！」

貪欲な壺

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドロースする。

「俺は「E・HERO クレイマン」を守備表示で召喚！ カードを二枚セットしてターンエンドだ！」

E・HERO クレイマン

通常モンスター

星4/地属性/戦士族

攻 800/守2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

「俺のターン、ドロー！ 俺はランス・リンドブルムを生贄に捧げ、「ホワイト・ホーンズ・ドラゴン」を召喚！！ ホワイト・ホーンズ・ドラゴンの効果発動！ このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在する魔法カードを五枚まで除外し、除外した枚数×300ポイント攻撃力を上昇させる！ 俺は貴様の墓地からスパークガン、融合、貪欲な壺を除外！ 三枚除外したため攻撃力は900上昇する！」

「なにっ!？」

ホワイト・ホーンズ・ドラゴン 攻撃力：2200 3100

万丈目に場に現れたドラゴンに生えた一本の角、それが不思議な光を放ち始めたと思ったなら十代の場の三枚の魔法カードがその角に吸収されていく。そしてドラゴンの攻撃力が増大した。

ホワイト・ホーンズ・ドラゴン

効果モンスター

星6 / 闇属性 / ドラゴン族

攻2200 / 守1400

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在する魔法カードを5枚まで選択してゲームから除外する。

このカードの攻撃力は、この効果で除外したカードの数×300ポイントアップする。

「ホワイト・ホーンズ・ドラゴンでクレイマンを攻撃！ ホーンバスターブレス！！」

「ぐあああああつ！ くっ、リバースカードオープン、「ヒーロー・シグナル」！ その効果で俺はデッキから「E・HERO フェザーマン」を守備表示で特殊召喚！」

E・HERO フェザーマン 守備力：1000

ヒーロー・シグナル

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動することができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「甘いわ！ リバースカードオープン」「リビングゲデッドの呼び声」
！ 墓地から「ランス・リンドブルム」を攻撃表示で特殊召喚！
バトルフェイズ時の特殊召喚のため攻撃の権利がある。ランス・リ
ンドブルムでフェザーマンを攻撃！」

ランス・リンドブルム 攻撃力：1800

「こっちは通すか！ リバースカードオープン」「ヒーローバリア」
！ 俺の場にE・HEROが存在する時、相手モンスター一体の攻
撃を無効にする！」

ヒーローバリア

通常罫

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表
側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にす
る。

白い角を持つ赤き竜のブレスが地のHEROを破壊したと思ったら
仲間のHEROを呼ぶシグナルがその場を照らし出し、風のHERO
Oが守りを固める。しかしその次の瞬間万丈目の場に先ほど赤き竜
の生贄となった竜人が姿を現し、フェザーマンに突進する。しかし
その攻撃はHEROの防御用バリアで防がれた。

「ちっ、ターンエンドだ」

「い、一進一退ッス……」

「そっだね……」

万丈目が舌打ちをしてターンを終了し、観戦している翔が僅かに震えながら呟くとアルフもうんと頷いて返す。

「俺のターン、ドロー！」

十代は力強くカードをドローし、それを見るとよしと頷く。

「魔法カード「融合」を発動！ 場のフェザーマンと手札のバーストレディを融合！ もう一度力を貸してくれ、「E・HERO フレイム・ウィングマン」！！」

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻撃力：2100

「永続魔法「騎士道精神」を発動！ さらにHEROの戦いの舞台、「摩天楼 スカイスクレイパー」を発動するぜ！」

「これが噂に聞いた、クロノス教諭を倒したというコンボか……」

フィールドが摩天楼へと移り変わり、それを見ながら万丈目はそう呟く。

騎士道精神

永続魔法

自分のフィールド上モンスターは、攻撃力の同じモンスターとの戦闘では破壊されない。

摩天楼 - スカイスクレイパー -

フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

「いくぜ、フレイム・ウィングマンでホワイト・ホーンズ・ドラゴンを攻撃！ スカイスクレイパー・シユート！！ スカイスクレイパーの効果で攻撃力が1000ポイント上昇する！」

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻撃力：2100 3100

「ちいつ！、！？ 何故フレイム・ウィングマンが破壊されない！？」

「騎士道精神の効果により、同じ攻撃力同士のモンスターでの戦闘の時、俺のモンスターは破壊されない！ そして、フレイム・ウィングマンの効果発動！ 戦闘により破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手に与える！」

「くつ、ぐおおおおつ！！」LP3800 1600

万丈目の驚愕の声に十代が説明、そして続けての言葉の後フレイム・ウィングマンが発した炎が万丈目を焼き尽くす。

「…………あれ？ ダメージ計算おかしくねえか？ 3100のダメージのはず…………」

「フレイム・ウィングマンのバーン効果は墓地に送った時の攻撃力で参照されるんだ。だからホワイト・ホーンズ・ドラゴン本来の攻撃力、2200のダメージになるんだよ」

「あー。なるほど」

簡易状況説明

十代：LP2800 手札一枚

フィールド：フレイム・ウィングマン攻撃表示 摩天楼 スカ
イスクレイパー、騎士道精神発動中

万丈目：LP1600 手札三枚

フィールド：ランス・リンドブルム攻撃表示 リビングデッド
の呼び声発動中、伏せカード一枚

十代の言葉にアルフが説明の声を出し、それを聞いた十代は納得したように頷く。それからライが辺りをきよろきよろと見回すと口を開いた。

「翔、悪いけどトイレに行ってくる」

「え？ あ、うん」

「あ、僕も行くよ」

「アルフ君まで？」

ライの言葉に翔が頷くとアルフもそう言い、翔は首を傾げてから頷く。そして二人はその場を離れ、翔達の姿が見えなくなるとある一つの方向に向けて迷いなく走り出した。

「はあ、はあ、本当にこっちでいいんだろっな!？」

「ああ、ようやく見つけたぜ……」

「レッドのクズなんかを相手するなんてあいつも酔狂だよなあ」

「まあ、万が一のことがあったらいけねえからな。急ぐぞ」

森林のとある場所、四人のブルー男子が十代と万丈目がデュエルを行っている場所に向けて一直線に走っていた。すると突然パンパンパンという銃声はその場に響く。

「なんだ!？」

それに全員が足を止める。そこにライとアルフが木の後ろからゆっくりと姿を現した。

「お前らは昨日遊城十代と一緒にいた!？」

「オイ、戦ってるレッドの奴が万丈目に負けそうだからその姿を見させないとも言っのか?」

「別にレッドが負けるなんて当たり前だろ? 俺達のようなエリートなら当然、最底辺の野郎でもブルーならそれぐらい当たり前だか

らな」

「それよりさっきの銃声はなんだ？ デュエルじゃ勝てないからって直接的な攻撃か？」

「……」

ブルー男子四人の言葉にライとアルフは何も返さず、一瞬の目配せでタイミングを合わせて同時に口を開いた。

「おい、デュエルしろよ」

「ハア！！？？」

どの問いにも答えていない、正に言葉のドッジボール。ちなみに二人はこうなる事を予想しており、それでなおこう言った理由、それは……ただ単に一度やってみたかった。それだけである。

「冗談はさておき、まあ半分は冗談じゃないんだけど……主にデュエル挑む辺り」

「お、おまつ、レッドがブルー相手にデュエルを挑むだと！？ しかも四対二で！？」

「ああ。ハンディには充分だろ？」

アルフのコホンと咳をした後の言葉にブルー生徒Aが叫び声を上げるとライがさらっと続ける。それが逆鱗に触れたのかブルー生徒達から妙な怒気が発され始めた。

「あなた達が行おうとしている事は予想がついています。どうせブルーの人間、万丈目君がレッドの人間、十代君に負けるなんてブルーのプライドが許さない、だから邪魔をしに行く。とでもいうところでしょう？」

「はは、ただの推論で酷い言い方だな。まあ半分くらいは当たってるけど」

「確かにブルーの人間がレッドのクズに負けるなんてブルーの面汚しだけだな、万ーレッドが万丈目に勝った後、そいつを倒せば俺達は万丈目よりも強いということになる。あいつをブルーの恥にしてやろうとな」

アルフの言葉に二人のブルー生徒が返し、それを聞くとライがにやりと笑ってデュエルディスクを構える。

「ま、ボスを倒す前には門番を倒すが道理。俺達に負けたらこの場を退いてもらおうか、ルールは、四対二じゃ色々めんどくさそうだし俺とアルフがそれぞれ二人ずつ相手する変則タッグデュエルでどう？ ルールはタッグフォースルールでライフは共有4000」

「はっ、実質二対一かよ!？」

「無謀も間抜けもここまで来れば立派なもんだ、一瞬で片付けてやるよ!」

ライの提案に残ったブルー生徒二人が言い、六人がデュエルディスクを展開する。便宜上ライと戦う方をブルーA、ブルーB。アルフと戦う方をブルーC、ブルーDと呼ぶ事にしよう。

「「デュエル!!!」」
「「デュエル!!!」」

そして六人の声が重なり合った。

第三話 十代VS万丈目、そして空時兄弟の暗躍（後書き）

《次回予告》

翔「アニキと万丈目君のデュエルは一進一退……だつていうのにライ君とアルフ君はトイレに行くなんて、全く暢気だなあ……」
つて思つてたら森の中からデュエルの声が聞こえてきたし一体どうなっちゃうんだろ？……次回、「決着、十代VS万丈目、空時兄弟VSブルーカルテット」！デュエルスタンバイッス！」

いきなり二話も投稿しちゃって申し訳ありません……いや、ちゃんと十代VS万丈目、空時兄弟VSブルーカルテット全部終わらせてから投稿する予定だったんですが……いやーまあ長いこと長いことこりやどつかで切った方がいいと判断して前編後編に分ける事になりました。ま、それではー。

第四話 決着、十代VS万丈目、空時兄弟VSブルーカルテット

十代と万丈目がデュエルを行っている森の中、ライとアルフはそのデュエルに乱入しようとしているブルー寮の生徒四人を相手に二対一の変則タッグデュエルを行っていた。
まず最初にライの方を見てみよう。

「俺の先攻、ドローだ！俺は「ゴゴゴゴレム」を攻撃表示で召喚！カードを一枚セットしてターンを終了するぜ！」

ゴゴゴゴレム 攻撃力：1800

ゴゴゴゴレム

効果モンスター

星4/地属性/岩石族

攻1800/守1500

フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードは、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「俺のターン、ドロー。俺はモンスターをセットし、カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「ひやははっ、偉そうに言っておいて防御固めか！？俺のターンドロー！俺は「ジエネティック・ワーウルフ」を攻撃表示で召喚し、バトルだ！ジエネティック・ワーウルフでそのモンスターを攻撃！」

ジエネティック・ワーウルフ 攻撃力：2000

ジエネティック・ワーウルフ
通常モンスター

星4 / 地属性 / 獣戦士族

攻2000 / 守 100

遺伝子操作により強化された人狼。本来の優しき心は完全に破壊され、闘う事でしか生きる事ができない体になってしまった。その破壊力は計り知れない。

ブルーBの場に遺伝子操作によって強化された人狼が姿を現し、指示を聞くと突進していく。その四本の腕がライの場のモンスターを霧散させる。

「守備モンスターはジャイアントウィルス、戦闘破壊された事により効果発動！ ジャイアントウィルスは戦闘によって破壊された時、相手プレイヤーに500ダメージを与え、さらにデッキからジャイアントウィルスを任意の数攻撃表示で特殊召喚できる！」

「ちっ！」 LP4000 3500

「ジャイアントウィルスを二体、攻撃表示で特殊召喚！」

ジャイアントウィルス

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 悪魔族

攻1000 / 守 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

さらに自分のデッキから「ジャイアントウィルス」を任意の数だけ表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

霧散したウィルスがブルーBを襲い、ライフを僅かに削る。そしてさらにウィルスは増殖してライの場に二体姿を現した。

「うつつうしい！ ゴゴゴゴーレムでジャイアントウィルスを攻撃だ！」

「そのダメージ計算時に「ガード・ブロック」を発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドロウする！ そしてジャイアントウィルスの効果発動、相手プレイヤーに500ダメージを与える！」

ガード・ブロック

通常罫

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「ぐうつ！！」LP3500 3000

ゴゴゴという擬音を背負って動き出したゴーレムのパンチがウィルスを霧散させるがその衝撃波は障壁によって防がれ、霧散したウィルスがブルーBを襲う。

「ぐぬぬぬ、俺はリバーズカードを二枚セットしてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロ―！俺はジャイアントウィルスを生贄に捧げ、「冥界の魔王 ハ・デス」を攻撃表示で召喚！」

冥界の魔王 ハ・デス 攻撃力：2450

冥界の魔王 ハ・デス

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 悪魔族

攻2450 / 守1600

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する悪魔族モンスターが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

ライの場の巨大なウィルスが闇に包まれ、その中から冥界の魔王が姿を現す。

「ハ・デスでジェネティック・ワーウルフに攻撃！」

「させるかあ！ リバーズカード発動「ジャステイブレイク」！！俺の場に表側表示で存在する通常モンスターが攻撃宣言を受けた時、表側攻撃表示で存在する通常モンスター以外の、フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する！」

ジャスティブレイク
通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する通常モンスターが攻撃宣言を受けた時に発動する事ができる。

表側攻撃表示で存在する通常モンスター以外のフィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

攻撃宣言を受けたジェネティク・ワーウルフから突如雷が発せられ、ハ・デスとゴゴゴレムを破壊する。するとそれにブルーAが怒号を上げた。

「てめえ！ 俺のモンスターまで破壊されちまったじゃねえか！」

「うつせえ！ 黙ってる！！」

「なんだと!？」

完全に仲間割れしている。ライはそれを見るとやれやれと肩をすくめ、ターンを進める。

「俺はカードを二枚セットしてターン終了。そっちのターンだよー」

「ちっ！ 俺のターンドロー！ 俺も勝手にやらせてもらっぞ、俺はジェネティク・ワーウルフを生贄に捧げ、「人造人間 サイコ・ショッカー」を攻撃表示で召喚！！」

人造人間 サイコ・ショッカー 攻撃力：2400

人造人間・サイコ・シヨツカー

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 機械族

攻2400 / 守1500

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに罠カードを発動する事はできず、フィールド上の罠カードの効果は無効化される。

ジエネティック・ワーウルフが消えていき、さっきまでワーウルフが立っていたところに人造人間が立つ。

「テメエ！ 俺のモンスターを！」

「俺のモンスターを勝手に破壊したのは貴様だろうが！？ サイコ・シヨツカーの存在により、フィールド上全ての罠は発動できず、効果も無効化となる！ ゆけ、サイコ・シヨツカー！！」

「ちえつ、伏せていた速攻魔法「非常食」を発動！ 俺の場に存在する二枚の魔法・罠カードを墓地に送り、ライフを2000回復！ それからダメージ計算が行われるよ！ ぐうっ！！」LP400
0 6000 3600

非常食

速攻魔法

このカード以外の自分フィールド上に存在する魔法・罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動する。

墓地へ送ったカード1枚につき、自分は1000ライフポイント回復する。

「ふん、使えないカードを捨て、ライフ回復での悪あがきか？」

「まあ、それだけじゃないけどね。非常食によって俺の場はがら空きになった。ゆえにこのカードが冥府より姿を現す！ 来い、「冥府の使者ゴーズ」！ そして戦闘ダメージによって特殊召喚されたため俺の場に「冥府の使者カイエントークン」を特殊召喚！ カイエンの攻撃力・守備力はゴーズの特殊召喚のために受けたダメージと同じ数値、すなわち2400となる！」

冥府の使者ゴーズ 攻撃力：2700

冥府の使者カイエントークン 攻撃力：？ 2400

冥府の使者ゴーズ

効果モンスター

星7 / 闇属性 / 悪魔族

攻2700 / 守2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星7・攻/守？）を1体特殊召喚する。
このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメ

ージを相手ライフに与える。

「なん、だと……くそっ、カードを一枚セットしてターン終了だ！」

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード「大嵐」を発動し、フィールド上全ての魔法・罫を破壊する！」

大嵐

通常魔法

フィールド上に存在する魔法・罫カードを全て破壊する。

「「なっ、ぐああっ!?!」」

ライの発動した魔法によってフィールド上全て、今回の場合ブルータッグの魔法・罫が全て大嵐に巻き込まれて破壊される。

「いくぜ、「クリボー」を攻撃表示で召喚！」

「クリクリー！」

クリボー

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 悪魔族

攻300 / 守200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

ライの場に出現したのは茶色いモフモフとした毛に覆われた小さい悪魔。

「バトルフェイズ！ ゴーズでサイコショッカーを攻撃！！」

「ぐうっ！？」 LP 3000 2700

「続けてカイエンでダイレクトアタック！」

「ぐああっ！！」 LP 2700 300

冥府の使者の連続攻撃がブルータッグのライフポイントを削り、その残りを見るとブルーAが気づいたように口を開く。

「お、おい、待て、これって……」

「そういうこと。んじゃ、クリボーでダイレクトアタック！」

「「「ちよっ、まっ、あああああっ！！！！」」 LP 3000 0

上級モンスターのダイレクトアタックならともかく、攻撃力が500にも満たない下級モンスターの攻撃で止めを刺される、エリートと自負する彼らからすれば恐らく屈辱であろう最後であった。

時間を戻し、今度はアルフの戦いを見てみよう。

「俺が先攻をいただく！ ドロー、俺は「アックス・ドラゴニユート」を攻撃表示で召喚！ ターンエンドだ」

アックス・ドラゴニユート 攻撃力：2000

アックス・ドラゴニユート

効果モンスター

星4 / 闇属性 / ドラゴン族

攻2000 / 守1200

このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

「僕のターン、ドロー。僕は「レッド・ガジェット」を守備表示で召喚し、効果発動！ このカードの召喚、特殊召喚に成功した時デツキから「イエロー・ガジェット」を手札に加えます。さらに手札から永続魔法「マシナリーズ・フロントライン機甲部隊の最前線」を発動！ 僕の場の機械族モンスターが戦闘によって破壊された時、一ターンに一度だけそのモンスターより攻撃力が低く、且つ同じ属性の機械族モンスターを一体特殊召喚できます」

レッド・ガジェット 守備力：1500

レッド・ガジェット

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族

攻1300 / 守1500

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」1体を手札に加える事ができる

イエロー・ガジェット

効果モンスター

星4/地属性/機械族

攻1200/守1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

マシンナース・ラントライン

機甲部隊の最前線

永続魔法

機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！俺は「キラー・トマト」を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズ、アックス・ドラゴニウトでレッド・ガジェットを攻撃！」

アックス・ドラゴニウト 攻撃力：2000

キラー・トマト 攻撃力：1400

キラー・トマト

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族

攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

手に斧を持った竜人が赤きガジェットに襲いかかり、ガジェットはなすすべもなく破壊される。

「機甲部隊の最前線の効果発動！ デッキからレッド・ガジェットの攻撃力1300以下の地属性機械族、「イエロー・ガジェット」を特殊召喚し、効果発動！ デッキから「グリーン・ガジェット」を手札に加えます！」

イエロー・ガジェット 守備力：1200

グリーン・ガジェット

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族

攻1400 / 守 600

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

「ダメージステップ終了時、アックス・ドラゴニートは守備表示に変更される。そしてキラール・トマトでイエロー・ガジェットを攻

撃！」

アックス・ドラゴニユート 攻撃力：2000 守備力：1200

「ぐっ！！」

「カードを一枚セットしてターン終了だ」

二体の闇モンスターの攻撃によりアルフの場は全滅、そしてブルーDのターンエンド宣言を聞くとアルフはデッキに指をかけた。

「僕のターン、ドロー！」

アルフはカードをドローすると目を丸くし、くすつと笑みを浮かべる。それにブルー二人が眉をひそめるとアルフは手札を一枚取った。

「速攻魔法「サイクロン」を発動！ その伏せカードを破壊！」

「くっ！」

アルフの発動した魔法から放たれた竜巻がブルーDの伏せたカードを破壊し、それに彼は小さく呻く。

「「マシンナーズ・ギアフレーム」を攻撃表示で召喚！ ギアフレームの効果発動、このカードが召喚に成功した時、マシンナーズ・ギアフレーム以外のマシンナーズを手札に加える事が出来る。僕は「マシンナーズ・カノン」を手札に加える！」

マシンナーズ・ギアフレーム

ユニオンモンスター

星4 / 地属性 / 機械族

攻1800 / 守0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。

)

マシンナーズ・カノン

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族

攻0 / 守2200

このカードは通常召喚できない。

手札から機械族モンスターを任意の枚数墓地へ送った場合に特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力は、このカードの特殊召喚時に墓地へ送ったモンスターの数×800ポイントアップする。

「そして僕は手札の機械族、「イエロー・ガジェット」、「グリーン・ガジェット」、「マシンナーズ・ソルジャー」、「スクラップ・リサイクラー」を墓地に送り、マシンナーズ・カノンを特殊召喚!

マシンナーズ・カノンの攻撃力はこのカードの特殊召喚のために墓地に送ったモンスターの数×800、すなわち今回の場合4×800で3200となる!」

マシンナーズ・カノン 攻撃力：0 3200

「攻撃力、3200!?!」

「まだ終わらないよ！ 手札から速攻魔法「リミッター解除」を発動！ 僕の場の機械族モンスターの攻撃力は二倍になり、このターンのエンドフェイズに破壊される！ でも、このターンで終わらせればエンドフェイズなんて関係ないよね？」

マシンナーズ・ギアフレーム 攻撃力：1800 3600

マシンナーズ・カノン 攻撃力：3200 6400

リミッター解除

速攻魔法

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「ば、馬鹿な……」

「嘘だろ……」

「終わりだね。マシンナーズ・カノンでキラァ・トマトに攻撃！
フォース・カノン・ブラスター!!」

「ぐあああああぁっ!!!」 LP4000 0

ブルータッグは信じられんとばかりの表情を見せており、アルフはにたあと笑うと攻撃を指示、それを聞いたマシンナーズ・カノンは

自らが背負うカノン砲にエネルギーを溜める。そして発射されたエネルギー弾がキラール・トマトを破壊して尚勢いを止めずブルータッグに着弾、爆発した。一瞬でライフが0になり、ワンターンキルが成立。それを確認したアルフはにこにここと微笑む。

「あー、やっぱりワンターンキルって気持ちいいー」

「クリボーでダイレクトアタック！」

「「ちよっ、まっ、あああああっ！！！」」

微笑みながらそういうアルフの横でライとブルーABタッグの音が聞こえ、続けてライが右手を挙げてガッツポーズを取る。それからライが口を開いた。

「俺達の勝ちだ。そういうわけで、とっとと帰って」

「ふざけんなっ！ オシリスレッドのクズ如きが俺達オベリスクリューのエリートに口答えしてんじゃねえぞ！？」

「あ、やっぱりそうなるか……エールフィー」

ライの言葉にブルーAの怒号が響く、とライは呆れたように息を吐き上の方を向いてそう言う。とその場に一人の少女 エルフィが木の上からスタツと降り立つ。その右手にはエアガンが、左手にはビデオカメラが握られている。

「な、なんだ！？」

「さっきあなた達を威嚇射撃した者よ。ま、エアガンを人に向けて撃つのはマナー違反だけだね。さっきのあなた達のデュエルは全部ビデオカメラで録画しておいたわ。これが公開されたら“オベリスクブルーのエリート”が“二人がかり”で“オシリスレッドのドロップアウト”に“勝てなかった”という証明になるわよね。さーて、このビデオどうしようかしら？」

ブルーBが声を上げ、エルフィはくすくすと笑いわざとらしく部分部分を強調させながらそう言う。その言動は要するに「公開されなくなったら大人しく帰れ」という意味なのだがブルーカルテットは逆に身構えている。

「ふざけてんじゃ、ねえっ！！」

ブルーAがビデオカメラを奪い取ろうとエルフィに飛び掛る、が素早くライがその前に立ち、相手の左腕を取るとそのまま後ろに回りこみながら足払いで相手を転倒させ、彼の左腕の間接を極める。

「いててててて！！」

「さあ、とつとと帰るかこいつの左腕へし折られるか好きな方を選択して」

ブルーAの苦痛の声にライは平然とした様子で返し、ブルーの残る三人は固まるが無防備に立っているアルフをちらりと見たブルーBが素早くアルフに飛び掛り、彼にネックロックをかます。

「油断したな！ そっちこそそいつを放してカメラを渡してもらおうか！？ さもなくば」

「アルフ、手加減しろよ」

「へ？　ぐふっ!?」

ブルーBの言葉が終わる前にライはただそうとだけ言い、その言葉の意味をブルーBが理解する前に彼の腹にアルフの超至近距離エルボウスマツシユが決まり、彼はアルフを離してがくんとうずくまる。するとアルフは素早く立ち上がって右足を上げるとブルーBの後頭部に踵落としを叩き込み、意識を強制遮断させる。

「テ、テメツ！」

それを見た今度はブルーCがアルフに飛び掛り、右手を突き出して殴りかかるがアルフはその右腕を取ると軽々と一本背負いを行い、ブルーCを地面に叩きつける。しかもその威力は叩きつけた衝撃で地面を僅かとはいえ陥没させ、彼を気絶させるほどの力を持っていた。その一連の流れを見た残るブルーDは啞然としており、エルフイはくすつと笑う。

「ライとアルフに喧嘩売るなんてバカね。二人とも格闘技の経験者、しかも素手ならアルフの方が強いだよ」

「ま、二刀を持たれちゃったら兄さんには敵わないけど。というかエルフイも結構やる方でしょ?」

「さてと、残りはあんたとギリギリこいつだけだけど、どうする?」

「いだいいだいいだいいだ!!!」

エルフイの言葉にアルフが肩をすくめてそう言つとライはブルーDの方を見て尋ねる。彼に左腕の間接を極められているブルーAはギブギブというように右手で地面を叩いていた。

「……サレンダー降参します」

それを見たブルーDは頬を引きつかせ、両手を挙げてそう返す。それを聞くとライはよしと頷いてブルーAを解放し、彼は左肘を押さえながらせえせえと息をつく。それからブルーDが気絶しているブルーBとブルーCを両肩で担いでその場を退き、その横を歩くブルーAは途中で振り返ると「覚えてるよ！」と捨て台詞を残した。

「さてと……俺達も戻るか、見逃しちまう」

「ねえ、ところで万丈目君のデッキってどうなってるの？ 原作通り地獄デッキ？」

「いや、漫画版みたいなドラゴンだったよ」

それを見届けてからライが言うと今まで見張りを行っていたためデュエルを全然見ていなかったエルフィが尋ね、それにアルフが返しながら三人は十代と万丈目がデュエルを行っている場へと向かった。

「俺のターン、ドロー！」

一方十代VS万丈目、十代のフレーム・ウィングマンによって大ダメージを受けた万丈目はそう叫んでカードをドローする。そしてにやりと笑みを浮かべた。

「俺は「ゴーレム・ドラゴン」を守備表示で召喚し、魔法カード「ドラゴニック・タクティクス」を発動！ このカードは俺のフィー

ルドに存在するドラゴン族モンスター二体を生贄に捧げて発動し、俺のデッキからレベル8のドラゴン族モンスターを一体特殊召喚する魔法カード！ ランス・リンドブルムとゴーレム・ドラゴンを生贄に捧げ、デッキより姿を現せ、暴君の竜！ 「タイラント・ドラゴン」！！」

ゴーレム・ドラゴン 守備力：2000

タイラント・ドラゴン 攻撃力：2900

ゴーレム・ドラゴン

効果モンスター

星4 / 地属性 / ドラゴン族

攻 2000 / 守 2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他のドラゴン族モンスターを攻撃対象に選択することはできない。

ドラゴニック・タクティクス

通常魔法

自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター2体をリリースして発動する。

自分のデッキからレベル8のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する。

タイラント・ドラゴン

効果モンスター

星8 / 炎属性 / ドラゴン族

攻 2900 / 守 2500

相手フィールド上にモンスターが存在する場合、このカードはバト

ルフェイズ中にもう1度だけ攻撃する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードを対象にする罠カードの効果は無効にし破壊する。
このカードを他のカードの効果によって墓地から特殊召喚する場合、そのプレイヤーは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体をリリースしなければならない。

「行くぞ、タイラント・ドラゴンでフレイム・ウィングマンを攻撃！
タイラント・バーストオ！」

「ぐうっ!!」 LP2800 2100

「ターンエンドだ」

「俺のターン!.....」

暴君の竜の放ったプレスが十代のフェイバリットヒーローを破壊し、万丈目はターンを終える。それを聞いてから十代はそう声を上げるが状況はまずい。

「アニキ.....」

「.....へへっ」

思わず翔が心配そうにそう呟く、が次の瞬間十代はなんと笑い出した。それに万丈目が驚いたような表情を見せる。

「何が可笑的い？」

「ピンチだからさ」

「何!？」

「ピンチになるって事は、ワクワクするって事だからさ。これから俺がドローするこのカード、それだけでこの状況を逆転できる! そう思ったらワクワクしねえか? いくぜ、俺のターン!！」

十代は万丈目にそう言うのと改めて力強く宣言し、力強くカードを引く。そしてドローカードを見るとよしと微笑んだ。

「魔法カード「強欲な壺」を発動! カードを二枚ドロー!」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

十代が引いたカードはドローソース、その力によって一気に二枚の手札を新たに手に入れ、その内の一枚を発動する。

フュージョン・リカバリー

「魔法カード「融合回収」を発動! 俺の墓地に存在する融合魔法カードと融合に使用した融合素材モンスターを一体手札に加える!

俺は融合とフレーム・ウィングマンの融合に使用したフェザーマンを手札に加えるぜ! そして魔法カード「弱者の贈り物」! 手札のレベル3以下のモンスターを一体ゲームから除外する事でデッキからカードを二枚ドローする。俺はレベル3のフェザーマンをゲームから除外し、カードを二枚ドロー!」

融合回収

通常魔法

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

弱者の贈り物

通常魔法（漫画オリジナル）

手札のレベル3以下のモンスターを1体ゲームから除外する事で発動する。

自分のデッキからカードを二枚ドロウする。

一枚だった手札を一気に融合を含める四枚へと増強させる。だがまだ終わりではなかった。

「魔法カード「闇の量産工場」を発動！ 墓地から通常モンスター二体を手札に加える。俺はバーストレディとクレイマンを手札に加えるぜ！ そして「融合」を発動！ 手札のバーストレディとクレイマンを融合し、現れる！」「E・HERO ランパートガンナー」！！」

E・HERO ランパートガンナー 攻撃力：2000

闇の量産工場

通常魔法

自分の墓地に存在する通常モンスター2体を選択して発動する。選択したモンスターを自分の手札に加える。

E・HERO ランパートガンナー

融合・効果モンスター

星6/地属性/戦士族

攻2000/守2500

「E・HERO クレイマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが表側守備表示の場合、守備表示の状態で相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。

その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。

「くっ!?!」

「いくぜ、ランパートガンナーでタイラント・ドラゴンを攻撃！スカイスクレイパー・ランパート・ショット!! スカイスクレイパーの効果で攻撃力1000ポイント上昇だ!」

E・HERO ランパートガンナー 攻撃力：2000 3000

「くっ! だが、まだまだ!」LP1600 1500

ランパートガンナーが放つ弾丸の雨の前にタイラント・ドラゴンは倒れ、残った弾丸が万丈目にダメージを負わせる。それを受けてなお万丈目の戦意はなくなっていなかったが十代は手札を一枚取った。

「速攻魔法「融合解除」を発動! ランパートガンナーの融合を解除し、バーストレディとクレイマンを特殊召喚!」

「なん……だと……」

E・HERO バーストレディ 攻撃力：1200
E・HERO クレイマン 攻撃力：800

融合解除

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在する融合モンスター1体を選択してエクストラデッキに戻す。

さらに、エクストラデッキに戻したそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ランパートガンナーが光に包まれ、光が二つに分かれるとさつき融合素材となった二人のHEROが姿を現す。

「俺の勝ちだ！ クレイマンとバーストレディでダイレクトアタック！ バースト・クレイ・ナックル！！」

「ハアアアアッ！」

「ウオオオオオッ！」

十代の指示を聞いたバーストレディはクレイマンに向けて自らの得意技、バーストファイヤーを放ち、クレイマンはそれを自らの右腕で受け止めると燃え盛る拳を握り締め、万丈目へと突進する。

「ぐあああああぁっ！！！！」LP1500 0

その炎の拳が万丈目への止めとなり、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「よっしゃー!!!」

そしてデュエルに勝った十代は右手を高々と挙げ、満面の笑みで勝利の声を上げていた。

「やったツスー！」

そして翔もぴよんぴよんと飛び跳ねて喜びを表し、そうやっている後ろにライ達三人がやってくる。

「どうなった!?!」

「あーライ君アルフ君、あつエルフィさん、こんにちはツス。つい丁度終わっちゃったところツス、アニキが勝ったツスよ」

「そっか」

「間に合わなかった……」

ライの言葉に翔が返し、エルフィを見ると会釈する。それからの彼の言葉にアルフは残念そうな顔を見せ、エルフィも残念そうにため息をつく。

「いいデュエルだったぜ、万丈目！ ガツチャー!!」

「ふん……どうやらクロノス教諭を倒した実力は本物のようだな」

十代が決めポーズを見せながらそう言うが万丈目はそうとだけ言うのと立ち上がり、歩き始める。そしてライとすれ違い様に彼にこっそ

り声をかけた。

「世話をかけたな」

「何の事？」

「……そういう事にしておいてやる」

万丈目の言葉にライがすつとぼけるような声を出すと彼はふつと笑った後そうとだけ言い、その場を歩き去っていく。それを見送りながらライは頭をかいた。

「あゝ、ばれてたのかな？」

「みただね」

ライの言葉にアルフが笑いながら返す、とそれを聞いた翔が首を傾げた。

「何がツスか？」

「ああ、なんでもないよ。それより勝った十代君に一声かけてあげたら？」

「そっツスね。アニキー、おめでとー」

その言葉にアルフは誤魔化して翔を十代の元に送り、それからエルフィはふうと息を吐く。

「まったく、折角見張りとかやってたのに肝心のデュエルを見逃す

なんて……運がないわ」

「俺達もシメは見逃しちまったか……ま、その内俺達が十代に挑んでみようぜ？ さ、そろそろ授業終了の時間だ、帰ろうぜ」

「そうだね」

エルフィの残念そうな言葉にライは軽くそう言い、その言葉を聞くとアルフもうんと頷く。それから十代と翔も三人に合流、五人は森を出て行った。

第四話 決着、十代VS万丈目、空時兄弟VSブルーカルテット（後書き）

《次回予告》

翔「やったー！ 明日香さんからのラブレターッスー！ 待っててね明日香さーん！……ってええっ！？ 覗きの犯人！？ 退学！？

そんなーっ！！」

ライ「翔、他の人ならともかくエルフィを覗いてたら許さねえぞ」
アルフ「その場合、僕達は全力で君を吊るし上げるからね？」

翔「僕達友達でしょー！？ ア、アニキ、助けてーっ！！ 次回、

「偽ラブレター事件、女子寮での決闘 十代VS明日香！」

ライ・アルフ「デュエルスタンバイ！！」

いやー、十代のデツキって難しいですね……モンスターピン指しを表現するのがまさかここまで難しいとは……こりゃ再利用カード結構お世話になるかもな、融合モンスターもまだフレイム・ウィングマンだけと思ってたのに最終的にランパートガンナー呼び出しちゃったし……。

あ、ちなみに弱者の贈り物を見れば分かる通り、アニメオリカや漫画オリカも可能な限り使っていく予定ですのでよろしくお願いします。それでは。

第五話 偽ラブレター事件！女子寮での決闘、十代VS明日香

それは、単純ながらも奥が深いゲーム。

「くっ……」

相手の手の内を、心理を読み、相手の裏を確実にかく洞察力が必要となる。

事実そのゲームに参加している十代は目の前にいる相手の表情を見て何を狙っているのか、こっちは何を狙うべきか、自分の一枚しかない手札をちらりと見た後もう一度相手の持つ二枚の手札を見る。

「俺のターン……ドロー！」

そして十代はカードを引き抜き、そのカードを手札に加えると睨っていた目をゆっくりと開く。ドローしたカードには悪魔の絵と、こゝろ文字が書かれていた……JOKER、そう、ジョーカーと。

「だーっ！！！！ ババかーっ！！！！」

「よっしやー！ まだ勝負は分からないぜ、十代！！」

十代が悲鳴を上げ、ジョーカーを引かせた相手　ライはガッツポーズを作る。そう、彼らが今やっているのはデュエルではなくトランプ、ババ抜きだ。

「十代君もライもどっちも頑張れー。負けた方は明日の昼食、僕と二位の人の分奢りだよー」

それを横で眺めるアルフ　既に一位で勝ちぬけており、急にインスピレーションが湧いたと言って新たなデッキを試作している
は笑いながら二人に声援を送る。それを聞いた十代は気を引き締めなおすと二枚のカードを自分の背後でシャッフル、片手に一枚ずつ持って前に伏せた。

「さあ、これでどっちがジョーカーなのか俺にも分からねえ……右を引くか左を引くか……ライ、勝負だ！」

「おう！　俺の運とお前の運、どっちが上回るかが勝負を決めるぜ！」

二人はそう言い合うとバチバチバチと火花を散らしあい、ライはふうと息を吐くと十代の場の二枚のカードを見る。そのどちらかは自分を勝利に導くカード、もう一枚はこの勝負の決着を先へと延ばす悪魔のカードだ。

「……俺は、自分を信じる！　ドロー！！！」

ライはそう叫んで自分から見て左のカードを引き、手札に加える。すると右手をグツと握り締めた。

「っしやあ！　俺の勝ちだ！！！」

「くっそーっ！！！」

ライは二枚のカード　スペードとハートのキング　を場に出して勝利宣言をし、それを聞いた十代は悔しそうに声を上げる。

「んじゃ、明日の僕達の昼食は十代君の奢りだね。ご馳走様」

「ゴチになります!」

「ぐっ、仕方ねえ……にしても、翔の奴一体どこ行つたんだ?」

アルフの言葉に続いてライも十代に頭を下げながら言い、それを聞いた十代はぐつと唸るが諦めたようにうな垂れる。それから頭を上げてそう言い、それに二人も頷いた。

「そうだよな、折角だから昼食奢りババ抜き参加すりゃよかったのに」

「なんか用事があるって言ってたよね。そつえば妙ににやけてたような……」

ライが十代の言葉に頷くとアルフが顎に手をやり、虚空を見上げるような仕草を見せる。それを見てから十代も今日の翔の様子を思い出し始める。今日の翔は妙に変だった、体育に遅れてきたと思つたら妙ににやけてるし上機嫌だし、何かあったのか? 三人がそう考えていると突然ピッピという電子音が部屋に響く。

「ん? なんだ?」

「十代君のPDAだよ」

十代がきよるきよると部屋を見回すとアルフが十代の横にあるPDAを指差し、十代はそっかと呟くとPDAを取り、届いていたメールを開く。

「マルフジシヨウヲアズカッテイル、カエシテホシクバジヨシリヨウマデコラレタシ」

音声メールから聞こえるのはボイスチェンジャーでも使ったのだから機械的な妙な声、それを聞いた三人は顔を見合わせ、ライは瞬時に自分のPDAを取ると女子寮のエルフィに連絡を取る。

「もしもしエルフィ!?」

「あ、ライ……連絡行った?」

「ああ……んで、マジか?」

「うん、翔君がいるのは確かよ」

「分かった。すぐ行く」

「あ、ちょっと待って。女子寮は流石に警備が厳重なの、まあアルフなら別の意味で通り抜けられるだろうけど。まあ、だから………」

ライとエルフィはそう話し合い、ライがすぐに行くと言つとエルフィはそれを止めて言い、説明を始める。それを聞いた十代はふんふんと頷くがライとアルフは凄い嫌そうな顔を見せ、エルフィもあははと苦笑する。

「えっほ、えっほ」

「うぷ……」

「うう……」

それから場所は女子寮の裏手に広がる湖へと移り、十代はえっちらおっちらとオールを漕ぐがライとアルフはそれに参加しない。というか、船酔いしては無理な話だ。

「だ、大丈夫か？」

「へ、平気平気、船酔いなんて慣れて……うぶ」
「きゅ……」

十代が苦笑しながら尋ねるとライは顔を青くしながら返すが直後すぐに口に手をやり、アルフは目をぐるぐると渦巻きにしてすっかりグロッキー状態になっている。

「な、なるほど。だからエルフィの言葉に二人とも嫌そうな顔したんだな……」

「ああ、俺もアルフも乗り物には強いのに何故か船だけ異様な程に弱くて……母さん曰く父さんもそうなんだから遺伝なんだって……いらん体質まで遺伝しなくてもいいのに……」

「た、大変だな……」

ライの説明に十代は苦笑しながらオールを漕ぎ、ようやく湖を渡って三人は女子寮の裏手へと辿り着く。十代は船から降りると両腕を回して筋肉をほぐし、空時兄弟も船から降りて深呼吸をすると楽になったのか元気な表情に戻る。そして三人は女子寮の裏にやってくる、そこには両手を後ろで縛られた翔に、彼を取り囲むように立つ明日香、ジュンコ、ももえ、そしてエルフィがいた。

「来たわね、十代」

「アニキー！」

「ライ、船酔い大丈夫だった？」

「大丈夫になりてえよ、切実に」

明日香の言葉に翔が泣き声を上げ、エルフィが苦笑しながら尋ねるとライはため息をついて答える。するとジュンコとももえがアルフを見て絶句の様子を見せる。

「ア、アル、アルフ様まで……」

「ど、どうでしょう！？ 私お化粧もしてませんのよ！」

「？」

ジュンコとももえはアルフを見ると途端に慌て出し、それを見たアルフはきよとんとした表情で首を傾げる。それを見たライが納得したように頷いた。

「ああ、なるほど。確かにアルフなら女子寮へも入れるな……招待とかで」

「ええ。既にアルフって新入生の中じゃ大分人気が出てきているから、事実確認はしてないけど一説にはファンクラブまであるそうよ」

ライの言葉にエルフィがまた苦笑しながら返し、それから本題に入るために十代が口を開く。

「ところで、一体どういうことなんだ？」

「それが……話せば長いような長くないような……」

「こいつが女子寮の風呂を覗いたのよ！」

「「短っ！！」」

十代の言葉に翔が困ったように呟くとジュンコが翔を指差しながら叫び、それにライとアルフがツッコミの声を上げる。

「な、なんだって……」

「の、覗いてないって！」

ジュンコの言葉に十代が驚いたように呟くと翔はぶんぶんと首を横に振り、ライとアルフは翔とエルフィを交互に見るとライが先に口を開いた。

「翔、まさかとは思うけどエルフィを覗いてはいないよな？」

「返答如何では僕達は女子側について翔君を徹底的に吊るし上げ晒し首にしてみせるよ？ 安心して、切腹する時は僕が介錯してあげるから」

「の、覗いてないって！ っていうか、僕達友達じゃないんすか！
？ つかアルフ君怖っ！！」

空時兄弟の言葉に翔はまたぶんぶんと首を横に振って叫び、そう続けるが二人は一旦顔を見合わせるとまた翔達の方を向く。

「エルフィは俺の彼女だし、彼女と友達なら彼女の方が大事だから」
「それに、友達という区分で考えてもエルフィの方が圧倒的に付き合いたいし」

「僕は無実ツスー!!!」

兄弟のとんでもないほどにさらりとした言葉に翔は己の無実を叫ぶ。というか、さりげなく酷い兄弟だ。するとエルフィがくすくすと笑い声を零した。

「二人とも安心して、騒ぎの時私はホールで新しく買ったパック開けてたから」

「あ、そうか。そりゃ安心」

「んじゃ僕達は翔君弁護側だね」

エルフィの助け舟にライとアルフが安心したような声を出すと翔も心底安心したように息を吐く。すると今度は明日香が口を開いた。

「ねえあなた達、私達とデュエルしない？ もし私達に三連勝できれば風呂場覗きの件は大目に見てあげるわ」

「い、一敗でもしたら終わり!? ちょ、ちょっと、それこっちが圧倒的に不利!?」

「なんなら今ここで先生に突き出してもいいのよ?」

「ゴメンナサイ……」

明日香の言葉に翔が叫び声を上げるがジュンコの脅すような言葉に翔は一瞬で黙り込む。

「なんだかよく分からないけど……いいぜ！ デュエルを挑まれちゃ逃げるわけにはいかねえからな！」

「あなた、達、って事は俺達もか。よし、行こうぜアルフ！」

「オツケッ！」

明日香の提案に十代が頷き、ライが続けるとアルフも微笑みながら頷く。

「じゃあ、提案者だします私と十代が戦いましょう。エルフィ、ジュンコ、ももえ、残る二人はあなた達から選出しておいて」

「はい！」

「じゃ、私はライね。アルフとどっちが戦うかはご自由にどうぞ」
明日香の言葉にジュンコとももえがはいと声を出すとエルフィはさつとライの対戦相手に立候補、残る二人はアルフを標的に選んでいるためかそれに対し意見を出さずどっちが戦うかの相談を始める。

「じゃあ、いくわよ、十代」

「おう！ 楽しいデュエルをしようぜ！」

明日香の言葉に十代はにっこり笑いながらデュエルディスクを取り出してデッキを差し込み、明日香もふっと笑ってデュエルディスクを準備する。

「それじゃ、誰か来たらいけないしボートを使って湖の上にも移動を……」

「ちよ、ちよっと待て明日香、それは止めてやってくれ……」

「？」

明日香の言葉に十代が引きつった笑みを浮かべながらそう言い、その後ろでライとアルフがうんうんと頷くを見ると明日香は不思議そうな顔を見せる。

「ラ、ライとアルフは船に弱い。極端な話、動いてないフェリーに波が当たって揺れる程度で酔って倒れるくらいだから……それより不安定なボートの上なんて多分、デュエルどころの騒ぎじゃないわ」

「ああ、行きのボートの上でもぶっ倒れてたからな」

「そ、そうなの……分かったわ。じゃあここでやりましょう」

エルフィの説明に十代が肯定すると明日香はこくこくと頷くとそう続け、二人はデュエルディスクを展開する。

「デュエル！！！！」

そして二人の声が重なり合った。

「私が先攻を貰うわ、ドロー！ 私は魔法カード「融合」を発動！
手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合し、
「サイバー・ブレイダー」を融合召喚！」

サイバー・ブレイダー 攻撃力：2100

エトワール・サイバー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族

攻1200 / 守1600

このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。

ブレード・スケーター

通常モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族

攻1400 / 守1500

氷上の舞姫は華麗なる戦士。

必殺アクセル・スライサーで華麗に敵モンスターを切り裂く。

サイバー・ブレイダー

融合・効果モンスター

星7 / 地属性 / 戦士族

攻2100 / 守800

「エトワール・サイバー」+「ブレード・スケーター」

このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

相手のコントロールするモンスターが1体のみの場合、このカードは戦闘によっては破壊されない。

相手のコントロールするモンスターが2体のみの場合、このカードの攻撃力は倍になる。

相手のコントロールするモンスターが3体のみの場合、このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「おお！ ワンターン目から融合か！」

「ターンエンド」

明日香の場に現れた二体の戦士が光に包まれ、その光の中から新たな戦士が姿を現す。それを見た十代は目を輝かせ、明日香はそれをチラリと見た後ターンを終了した。

「よし、俺のターン。ドロー！……こっちもいくぜ！ 魔法カード「融合」を発動！ 手札のフェザーマンとバーストレディを融合し、マイフェイバリットヒーロー、「E・HERO フレイム・ウィングマン」を融合召喚！」

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻撃力：2100

「一気にいくぜ！ 魔法カード「H ヒートハート」を発動！ フレイム・ウィングマンの攻撃力を500上昇させ、今回は関係ねえけど、守備モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える！ フレイム・ウィングマンは相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える効果がある！」

H・ヒートハート

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。

E・HERO フレイム・ウィングマン 攻撃力：2100 2600

「これでサイバー・ブレイダーの攻撃力を上回った！ フレイム・ウィングマンで攻撃！ フレイム・シユートオ！」

十代の言葉を聞いたフレイム・ウィングマンは青い炎にその身を包みながらサイバー・ブレイダーに突進する。それを見ている明日香は、ただ冷静な笑みを浮かべている。

(甘いわよ、十代)

その眩きと同時に二体のモンスターがぶつかり合い、フレイム・ウィングマンの超至近距離火炎放射がサイバー・ブレイダーを焼き尽くす……かと思ったがサイバー・ブレイダーは両手を前に出してそれを防ぎ、僅かに後ろに逸れた火の粉が明日香に掠る。そしてフレイム・ウィングマンは十代の場に戻っていった。

「なっ……なんでサイバー・ブレイダーが破壊されないんだ!？」

「パ・ド・ドウ」

「え？」

「サイバー・ブレイダーは相手のコントロールするモンスターが一体のみの場合、戦闘によっては破壊されない。まあ、ダメージ計算は適用されるけどね」LP4000 3500

十代の言葉に明日香が冷静に言い、それを聞いた十代が聞き返すと明日香はやはり冷静に続ける。

「そうなのか……俺はカードを二枚セットして、ターンを終了するぜ」

十代は明日香の説明を聞くとふむふむと頷き、残る二枚の手札を両方場に伏せるとターンを終了する。

「私のターン、ドロー！ 私は「コールド・エンチャンター」を攻撃表示で召喚し、バトル！ サイバー・ブレイダーでフレイム・ウィングマンを攻撃！ 今のサイバー・ブレイダーは戦闘破壊耐性を持つため破壊されるのはフレイム・ウィングマンだけよ！」

コールド・エンチャンター 攻撃力：1600

「ぐっ！ リバースカードオープン「ヒーロー・シグナル」！ 俺の場のモンスターが戦闘によって破壊された時、手札またはデッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚する！ 俺は「E・HERO クレイマン」を守備表示で特殊召喚！」

E・HERO クレイマン 守備力：2000

「……カードを一枚セットし、ターンを終了するわ」

サイバー・ブレイダーの刃付きシューズによる蹴りがフレイム・ウイングマンを斬り裂くがその場に大地のHEROが救援に現れ、それを見た明日香は少し黙った後カードを一枚伏せてターンを終了する。

コールド・エンチャント

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族

攻1600 / 守1200

手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体にアイスカウンターを1つ置く。

このカードの攻撃力は、フィールド上に存在するアイスカウンターの数×300ポイントアップする。

E・HERO クレイマン

通常モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族

攻 800 / 守2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

ヒーロー・シグナル

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを二枚ドロー！」

十代 手札：零枚 二枚

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「E・HERO スパークマン」を守備表示で召喚！カードを一枚セットしてターンエンド！」

E・HERO スパークマン 守備力：1400

十代の場に光のHEROが守備の状態を現し、その後ろにカードが一枚伏せられた状態でターンが終了される。それを見た明日香はふふつと笑った。

「万策尽きたのかしら？ 私のターン、ドロー！」

明日香はそう言ってカードをドローし、サイバー・ブレイダーをちらりと見た。

「言っておくわ、サイバー・ブレイダーの効果、パ・ド・トロワ。相手がコントロールするモンスターが二体のとき、サイバー・ブレイダーの攻撃力は倍となる」

「そ、そんな!!」

サイバー・ブレイダー 攻撃力：2100 4200

明日香の説明に翔が悲鳴を上げる。

「「サイバー・チュチュ」を攻撃表示で召喚し、装備魔法「巨大化」をチュチュに装備！ 私のライフポイントが相手より下の時、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍となる！ いくわよ、十代！ サイバー・ブレイダーでクレイマンを攻撃！ グリッサード・スラッシュ!!」

サイバー・チュチュ 攻撃力：1000 2000

「そうはいくか！ この攻撃宣言時にリバーズカードオープン「レスポンシビリティ」！ 俺の墓地にレベル5以上のHEROが存在する時、相手の攻撃モンスターを破壊する！ 俺の墓地にはレベル6のフレーム・ウイングマンが存在するぜ！ ヒーローは死してなお、マスターを守るためその責務を果たす!!」

「!？」

クレイマン目掛けて突進していくサイバー・ブレイダーの前に突如フレーム・ウイングマンの幻影が現れ、カウンターのように撃ち出したフレーム・シュートがサイバー・ブレイダーを焼き尽くす。

「まだよ！ スパークマンだけでも破壊する！ コールド・エンカウンターでスパークマンを攻撃！」

「リバーズカード、オープン！」「アナザー・フュージョン！」
このカードは俺のモンスターが相手モンスターの攻撃対象になった時に発動でき、俺のフィールド上から融合モンスターによって決められた、攻撃対象モンスターを含むモンスターを墓地に送り、融合モンスター一体を融合デッキから融合召喚扱いとして特殊召喚し、攻撃モンスターとバトルを行う！ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される」

「くっ!？」

「攻撃対象となったスパークマンとクレイマンを融合！ 現れる、
「E・HERO サンダー・ジャイアント」!!!」

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力：2400

サイバー・チュチュ

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族

攻1000 / 守 800

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

E・HERO サンダー・ジャイアント

融合・効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族

攻2400 / 守1500

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用することができる。

巨大化

装備魔法

自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

レスポンスイビリティ

通常罠（漫画オリカ）

自分の墓地にレベル5以上のHEROと名の付くモンスターが存在する時、相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

その攻撃モンスター1体を破壊する。

アナザー・フュージョン

通常罠（漫画オリカ+カイナアレンジ）

自分フィールド上のモンスターが相手モンスターの攻撃対象になった時のみ発動できる。

自分のフィールド上から融合モンスターカードによって決められた、攻撃対象モンスターを含むモンスターを墓地に送り、融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚し、攻撃モンスターと戦闘を行う。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンのエンドフェイズに破壊される。

「コールド・エンチャントに反撃！ ボルティック・サンダー！」

「ぐづづううっ！！」 LP3500 2700

「明日香さん！！」

突然現れた雷の巨人が放った雷撃にコールド・エンチャントが破壊され、明日香のライフポイントも削られる。それにジュンコともえが声を上げた。

「でも、この時サイバー・チュチュの効果が適用される！ サイバー・チュチュは相手フィールド上に存在するモンスターがこのカードの攻撃力より高い時、相手にダイレクトアタックする権利を得る！」

「え！？」

「サイバー・チュチュの攻撃力は2000、あなたのサンダー・ジヤイアントの攻撃力を下回っている。よって、サイバー・チュチュでダイレクトアタック！」

明日香の宣言を聞いたサイバー・チュチュは滑るようにサンダー・ジヤイアントを通り抜けると高速でスピンの状態で十代に近づいた。

「ぐはあっ！！」 LP4000 2000

サイバー・チュチュ 攻撃力：2000 500

そしてスピッキクが十代に炸裂、一気にライフを削り取った。そして十代のライフの方が明日香より少なくなったため、サーバー・チュチュの攻撃力が半減する。

「カードを一枚セットしてエンドフェイズ、サンダー・ジャイアントは破壊されるわ。ターン終了」

明日香の言葉と共にサンダー・ジャイアントは木っ端微塵に砕け散り、十代はくそつと呟く。

「俺のターン、ドロー！」

十代はそう言ってカードをドローし、それを見るとよしと頷く。

「俺の手札がこれ一枚だけの時、「E・HERO バブルマン」は特殊召喚できる！そしてバブルマンの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、俺のフィールドに他のカードがない場合、デッキからカードを二枚ドローする事ができる！ドロー！」

E・HERO バブルマン 攻撃力：800

十代 手札：零枚 二枚

E・HERO バブルマン

効果モンスター（アニメ効果）

星4 / 水属性 / 戦士族

攻 800 / 守 1200

手札がこのカード1枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚

する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分のフィールド上に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロースする事ができる。

「出た！ 強欲なバブルマン！」

「というか、何気にOCG効果でも適用できる状況だよ」

それを見たライが掛け声を掛け、アルフは十代の状況を見て説明を行う。それを見た明日香はさつき伏せたカードをちらりと見てふつと笑みを浮かべる。

（かかってきなさい、十代。攻撃力800以上のモンスターで攻撃してきた時があなたの最期、この伏せカード、「ドゥールパッセ」で攻撃をダイレクトアタックに移し変え、ライフポイントがあなたを下回った時巨大化によって攻撃力が倍加したサイバー・チュチュのダイレクトアタックでライフは丁度0となる）

「俺は魔法カード「貪欲な壺」を発動！ 俺の墓地からフェザーマン、バーストレディ、スパークマン、フレイム・ウイングマン、サnder・ジャイアントをデッキに戻してシャッフル、新たにカードを二枚ドロース！ さらに魔法カード「融合回収」フュージョン・リカバリーを発動！ 俺の墓地から融合魔法カードと、融合に使用したクレイマンを手札に戻す。まだまだあ！ 魔法カード「E・エマージエンスコール」！ 自分のデッキからE・HEROを手札に加える。俺はさつき貪欲な壺でデッキに戻したスパークマンを手札に加えるぜ！」

貪欲な壺

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシヤッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

融合回収

通常魔法

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

E・エマーゼンシーコール

通常魔法

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「まさか!?!」

「そのまさかさ! 魔法カード「融合」を発動! クレイマンとスパークマンを融合し、もう一度現れる! 「E・HERO サンダー・ジャイアント」!?!」

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力:2400

「サンダー・ジャイアントの効果発動! 手札を一枚捨てる事により、サンダー・ジャイアントの攻撃力より元々の攻撃力が低いモンスター1体を破壊する! 手札を一枚捨て、サイバー・チュチュを破壊!?! ヴエイパー・スパーク!」

「くうっ!! (まずい、これでは!?)」

雷の巨人の放つ雷撃が明日香の場の小さなサイバー・ガールを破壊する。

「いくぜ、バブルマンのダイレクトアタック! バブル・シュート!」

「くっ!」LP2700 1900

水のHEROが放った泡の弾丸が明日香を撃ち、そこに雷の巨人が立つ。

「これで終わりだ! サンダー・ジャイアントでダイレクトアタック! ボルティック・サンダー!!」

十代の嬉しそうな声での宣言を聞くと雷の巨人は両手を近づけ、電撃の球を作りあげて両腕を振り上げる。明日香はそれをやけに冷静に見上げていた。

(そう、私の……)

そして、雷が明日香に降り注ぐ。それを見た明日香はつつむき、目を瞑った。

(負け……) LP1900 0

明日香の心の中での眩きの直後、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「よっしゃー！　まずは一勝！　ガツチャ！　楽しいデュエルだったぜ！」

十代は嬉しさを全身で表現しているかのごとくぴょんぴょんと飛び跳ね、明日香に向けて決めポーズを決める。するとジュンコが苛立ちの目を十代に向ける。

「オシリスレッドの分際で！　マグレで勝ったくせにいい気になってんじゃないわよ！　明日香さん、あなたの仇は私が討ちます！」

「ちょ、ちょっとジュン……」

ジュンコはそう叫んで前に立ち、それに明日香が声を掛けようとするがその瞬間、ガシャンガシャンと、気のせいかもしれない凄く荒々しいデュエルディスクの展開音はその場に響く。

「……え？」

「ア、アルフ君？」

十代と明日香の音が合わさり、翔がデュエルディスクを展開した相手　アルフを見る。それを見たライとエルフィはあちゃーというように額に手をやっている。

「エルフィはライと戦うんだよね？　じゃあ、君の相手は自動的に僕になる」

「そ、そうだった！　ア、アルフ様、よろしく願います！」

アルフの気のせいか刺々しい声にジュンコは気づいたように顔を赤くしてペコリと頭を下げる。それに対しアルフは何も返さずにデュ

エルディスクにデッキを差し込んだ。

「デュエル！！！！」

そして二人の声が重なった。

第五話 偽ラブレター事件！女子寮での決闘、十代VS明日香（後書き）

《次回予告》

翔「アニキが明日香さんに勝ったのはよかったけど、ア、アルフ君、一体どうしちゃったの？……」

ライ「ま、あいつも俺の弟ってこった。さーて、俺もエルフィとの戦い、気合入れないとな」

翔「？ ま、まあいいや。次回！ 「ワン・ショット・キル！？」

起動せよ、マシンナーズ・カノン！！ 交わらざる対決、悪魔VS天使！！」

ライ「デュエルスタンバイ！！」

こんにちは、カイナです……漫画オリカも遠慮なく使うとか言いましたが、アナザー・フュージョンのちよつとしたアレンジ、これ大丈夫ですかね？

いや、ちよつと捻ったルールやプレイングになると途端に分からなる素人の考えですが普通に融合しただけじゃまき戻しが発生して漫画みたいに戻り討ちーなんて芸当出来ないと思うんですよね。だから出来る限り再現するためにアナザー・フュージョンに相手の攻撃時のみ発動可能で攻撃対象となったモンスターを融合に強制使用する代わりに融合モンスターが攻撃を受けるという効果を付け加えてみました。僕の記憶が正しければアナザー・フュージョンって確か相手の攻撃に対抗してしか発動してません……よね？ つかあれ発動したの第一話の嫌味教師（名前忘れた）だけですよね？

それと言いつつになります……そうでなきゃアナザー・フュージョンってもの凄い使い勝手悪いじゃん！ ワンターン伏せてないと使えんわ融合召喚してもそのモンスターはほとんどターンの壁のみでエンドフェイズ自壊って！

んーととりあえず、ルールに対する知識にはあんま自信がないので

アナザー・フュージョンの効果訂正の意見があったらお聞かせください。よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4694z/>

遊戯王GX～パラレル・トラベラー～

2011年12月29日14時49分発行